怪物は悟空が女の姿になつて、臥床の上に寝て居るのを見ると、直に近寄つて來ましたが、行者はいきなり怪物の長い喙を捉んで、突倒したので、怪物は驚いて、

『お前は何か怒つて居るのか？』といひながら起き上つて來る。

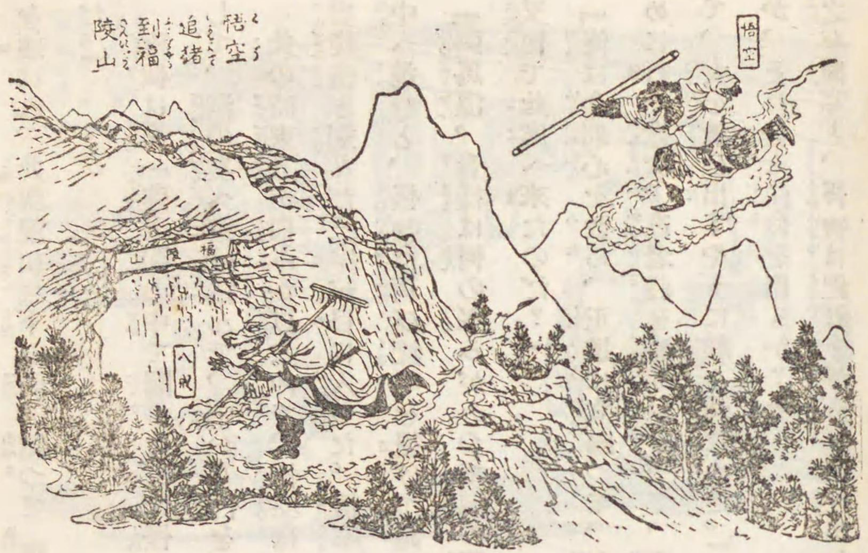
『否』と首を振つたが、行者は故意と嘆息をついて、『今日聞いて居ると、父と母が墻の外へ來て、散々に私を罵つて、「あんな怪物といつまで一緒になつて居るのだ。」と申します。而して「あんな者を婿にして置くのは家門の恥だから、法師を連れて來て、今のうちに逐ひ出してしまふ。」と申すのです。』

『そんな事なら心配には及ばない。』と妖怪が言つた。『俺は變化の術も知つて居れば、九齒の鈀手も持つて居る。どんな法師が來ても恐れることはない。』

『父上は五百年前に天宮を鬧がした齊天大聖といふ人を呼んで來て、汝を捉まへさせるとか言つて居りました。』

『なに、それは大變だ！』と言つて妖怪は顏色を變へた。『齊天大聖に來られては、到底敵はない。』

悟空は此時原身を現はして、妖怪の衣服を把むと、妖怪は悟空の顏を見るや否や、



衣服を裂き破り、一道の火光となつて逃げて行く。

悟空は直に雲に駕つて追ひ掛けると、忽ち一座の高山へ來て、怪物は山上の洞へ飛込んだが、直に本相を現はし、九齒の鈀手を執つて向つて來た。

行者は如意棒を以て渡り合ひながら、『貴樣は何ういふ怪物だ。素性を明かして降參せよ。』と呼び掛ける。

『俺は原來の妖怪ではない。』と怪物も戰ひながら言つた。『天上に居た頃は、天蓬元帥の職を奉じて、天河の水軍を總督して居たが、一年蟠桃會の時、醉つて廣寒宮に上り、嫦娥に戲れた科によつて、天上

を逐はれ、此福陵山に下る時、錯つて猪の胎に入つたので、名を猪剛鬣と呼ぶ者だ。』

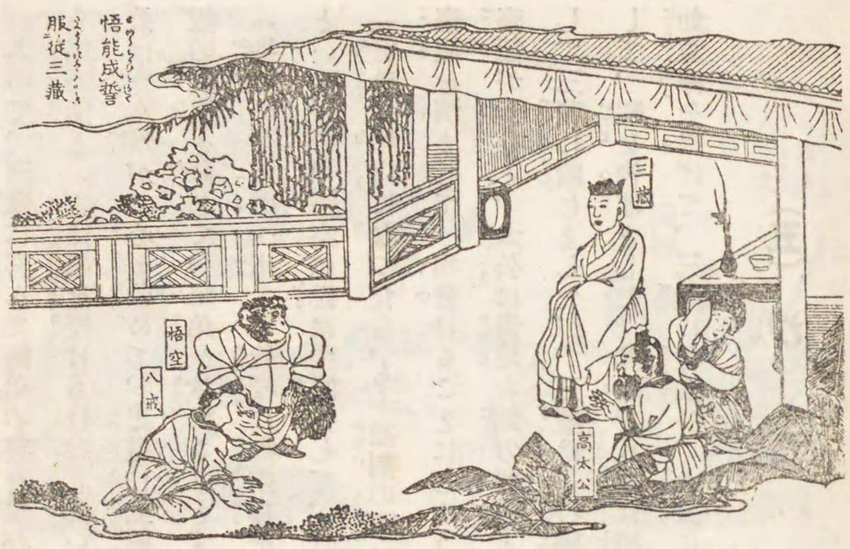
兩個は又一連り闇の中で鬪つたが、怪物は到底敵はないと思つたか、俄に風を起して、洞の奥へ逃げ込んで、中から門を閉めてしまつた。

此の時東方が白みかけたので、悟空は近寄つて洞門の邊を見ると、一つの石碣に雲棧洞と刻んだ三字が目に入つた。悟空は進み寄つて、門の扉を一打に打碎いて、中へ進むと、怪物は再び鈀手を提げて跑け出したが、

『弼馬溫、貴樣は何の怨みがあつて洞の門を打破るのだ？』と叫び立てた。『貴樣は又何で此處へ來たのだ？』

『俺は今邪心を改め、正道に立歸つて、東土の三藏法師を守護して、西天へ經を求めに行く途次、高老莊を通りかゝつて、高太公から貴樣の話を聞き、貴樣を生捕つて、女を救ひ出すやうに賴まれたのだ。』と行者が答へた。『さア早く出て降參するか、それとも生命を出すか？』

之を聞くと、怪物は鈀釘をがらりと投出して、言葉を改めて言つた。



『經を取る人が來て居るなら、俺にも會はして貰ひたい。觀音菩薩の敎へを受けて、俺も久しく其の人を待つて居た。何故早くに然う言はないのだ？』

斯う言つたが、尙ほ悟空が信じない樣子を見て阿彌陀佛の名を呼んで誓ひを立て、悟空の言ふがまゝに雲棧洞を燒き拂つて、三藏の前へ伴はれて行きました。

此時三藏は、妖怪が自分の前へ、跪いて、禮拜するのを見て、其の理由を尋ねると、妖怪は觀音菩薩に遇つて敎化を受けたことから、其後は五葷三厭の戒を守つて、三藏の來るのを待つて居たことを話して、今から徒弟になつて西天へお供をしたいと

いふので、三藏は喜んで師弟の契を結び、又悟空と兄弟の約束をさせ、前に菩薩から猪悟能といふ法名を授けられたと聞いて、別に八戒といふ號を與へました。高太公は今八戒が、心を改めて、正道に立歸つたのを見て、此上もなく喜んで、直に齋飯の支度を命じて、師弟を款待さうとすると、八戒は急に太公を引留めて、

『拙荆に、此處へ出て、皆樣に御挨拶をするやうに申付けて下さい。』

といふので、悟空は思はず哄笑して、

『賢弟、和尚になつたら、もう拙荆の事は言ひつこなしだ！』と言つたが、『さア〳〵齋飯を濟まして、出發けることにしよう。』

齋飯が濟むと、太公は青地の錦の袈裟と一足の草鞋を八戒に贈り、又銀二百兩を出して三藏に獻じましたが、三藏は、行脚の身に銀子の必要はないから、と堅く辭退して、暇を告げました。其處で八戒は澁々行李を背負つて、馬の前に立ち、悟空は如意棒を提げて、三藏に付添ひ、太公に別れて、西に向つて出發しました。

(五) 沙悟淨

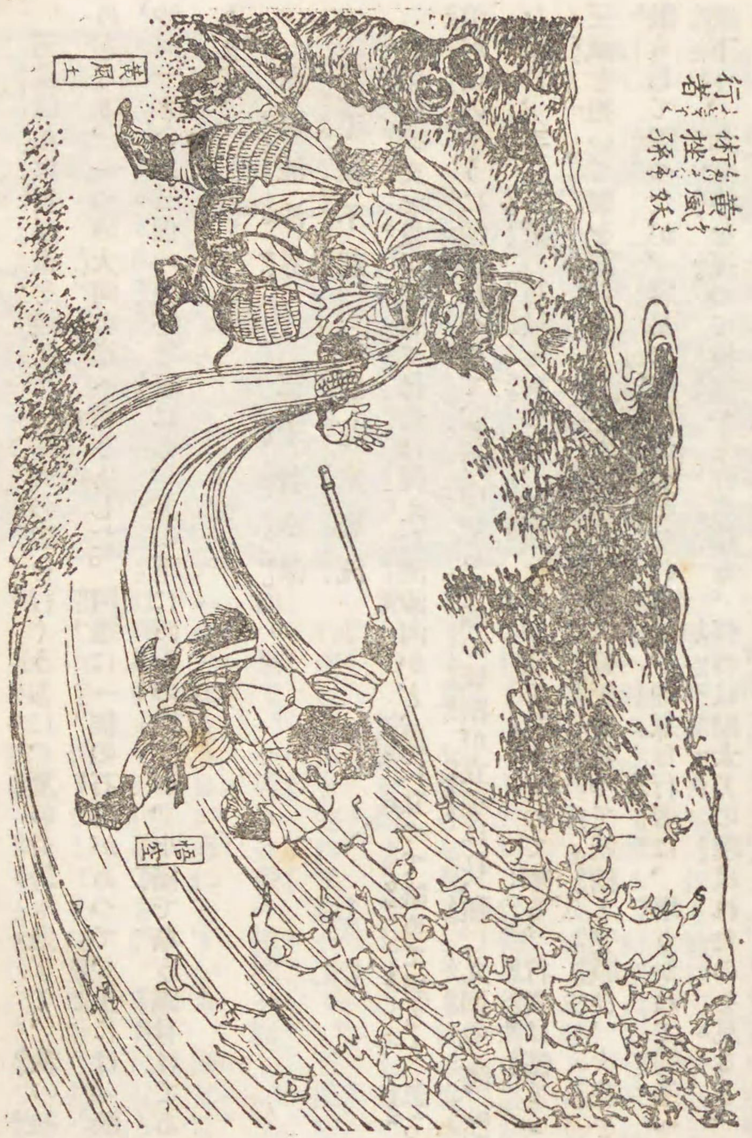
三藏師弟は、高老莊を過ぎて、西に進むこと一月許りで、烏斯藏國の界を過ぎ、浮屠山といふ高山の麓へ着いた。此山には烏巢禪師といつて、香檜樹の頂上に巢を造つて、道を修めて居る聖者があつて、過去未來一切の事に通じて居ると、八戒の話に聞いたので、三藏は山を分登つて禪師を拜し、西天に到る里程を尋ねます。禪師は樹から下りて、西天に到る道の遠いことを告げ、又其の道には魔障の難の多いことを語つて、多心經一卷を三藏に授けました。

『魔障の難に遇つたら、只此の經を念ずるがよい、自ら害を免れることがあるでであ

らう。』

と言ふかと思ふと、禪師は身から金色の光を放つて、元の巣へ上つてしまつた。

三藏は禪師に拜謝して山を下り、道を急いで行くうちに、やがて夏の炎天に向つて、黃風嶺といふ山にさしかゝりました。此山中には黃風洞といふ洞があつて、黃風大王と呼ぶ妖魔が、數多の配下を率ゐて、棲んで居たが、師弟は山中に入つて、圖らずも三藏を此の妖魔の配下に攫はれた。悟空は八戒と力を協せて、師父を奪ひ返さうと思つて、黃風洞へ押掛けて行くと、黃風大王は口から黃色の風を吐いて、悟空の眼を吹潰したが、悟空は觀音菩薩の加護によつて、風眼の妙藥を授かり、又小須彌山の禪院に住む靈吉菩薩の助けを借りて、とう〳〵此妖魔を退治して、三藏を黃風洞から救ひ出した。此の黃風大王の正體は、黃毛の鼠貂で、原は靈山の麓に居た得道の鼠でしたが、瑠璃の盞に盛つた燈油を偸んで、金剛に捉へられるのが恐さに、此山中へ逃げ込んで、妖魔となつたのです。其口から吐く黃風は、三昧神風と言つて、普通の人間は之に吹かれゝば、命がないものとなつてゐる。靈吉菩薩は如來の仰せを受けて、此の風魔の鎭押となつて居たのですから、直に風魔を捉



へて、鼠の正體を現はさせ、如來の許へ連れて行きました。

三藏師弟は黄風嶺を越えて、平野の間を行くうちに、夏の炎暑も過ぎて、秋の初めとなり、一つの大河の岸へ着きました。河邊に一個の石碑があつて、上には『流沙河』といふ三個の篆字を現はし、其の下に四行の文字が、小楷で斯う鐫付けてあります。

八百流沙界　三千弱水深
鵝毛飄不起　蘆花定底流

師弟は碑文を見て、さては音に聞えた流沙河かと、岸に立つて眺めて居ると、忽ち浪が山のやうに湧きかへつて、其の中から一個の妖精が立現はれ、頸に九個の髑髏を掛け、手に一根の寶杖を握つて、三藏を目がけて打かゝつて來る。行者は慌てゝ三藏を抱いて難を避けると、八戒は行李を棄て、釘鈀を執つて妖精と交戰ひ、火花を散らして戰つたが、容易に勝負がつかないので、短氣な行者は、堪りかねて河邊へ跳下り、如意棒を揮つて横側から打ち掛る。怪物は助太刀の現はれたのを見ると、忽ち身を轉して流沙河の底へ逃込んでしまつたので、八戒は一緒に水中に躍り込ん

で、何處までもと追つて行き、又もや水中で戰つたが、八戒は佯り輸けて、妖怪を水上へ誘き出して來る。行者は雲を飛ばして怪物の後へ廻り、八戒と夾擊ちにして生捕らうとしたが、怪物は行者の雲から下り立つた樣子を見て、又も河の底へ沈んで、踪跡を晦ましてしまひました。

行者は八戒を連れて岸へ上り、三藏の前へ來て、一通り合戰の模樣を話し、

『今日はもう日が暮れますから、師父には此岸の上でお寢み下さい。明日になりましたら、何とかしてあの妖精を生捕つて、此河の案内をさせませう。』と言つたが、『どれ一走り齋を化うて來よう。』

と雲に駕つて北の方へ飛んで行つたかと思ふと、直に一鉢の素齋を持ち歸つて、三藏に獻じました。八戒は之を見て、

『哥々、何處まで行つて、齋を化うて來たのか？』

『此處から北へ五六千里行つた處に、一群の人家が見つかつたから、其處で化うて來た。』

『笑談を言つちやいけない。今の間に五六千里の路が往つて來られるものか？』

『老孫の觔斗雲は一飛に十萬八千里を走るのだ。五千里や六千里の路は須臾を動かすよりも譯はない。』

『それ程の術があるなら、哥々が一つ師父を背負つて、此河を飛越したら何うだ。然うしたら、何も骨を折つて、あの妖怪を生捕るには及ぶまい。』

『古から「太山を遺つるは、輕き事芥子の如く、凡夫を携えて、紅塵を脱し難し。」と言ふが、師父は凡胎肉骨の人で、斯うして國々を歷廻つて、業を積んで行かなくては、苦海を超脱する事が出來ないのだ。』と行者は八戒に說き聞せる。『山を移し、地を縮める法はあつても、此凡夫を雲に駕せる法はない。我々は只師父の身命を保護

して、一步々々難行を蹈ねて行くより外はないのだ。』

師弟三人は、流沙河の東岸に一夜を明かして、翌朝又々八戒を遣つて、水中の妖怪を誘き出させたが、妖怪は昨日に懲りて水の傍を離れないので、どうしても生捕りにすることが出來ません。行者も終に策が盡きて、三藏を八戒に託んで置いて、觀音菩薩の助力を請ひに、南海を指して飛んで行きました。やがて普陀落山へ着き、紫竹林の外で雲を下り、菩薩を拜して、一伍一什の事を啓上げると、觀音は聞き取つて、

『猴子め、又强がつて、經を取る事を言はなかつたと見える。』と笑ひながら言ふ。

『其怪物は、先年我が勸化して、唐僧を保護して、西天へ行くやうに言ひ含めてあるのだから、經を取ることを言ひ出せば、直に歸順するのに。』

觀音は斯う言ふと、惠岸を喚んで、袖の中から一個の紅い葫蘆を出して渡しながら、

『汝は悟空と同伴つて流沙河の上に行き、先づ悟淨を呼び出して、唐僧に歸依させ、彼が頸に掛けた九個の髑髏を聯ね、其正中へ此の葫蘆を据えて、法船を造り、唐僧を載せて流沙河を渡すがよい。』

と命けました。惠岸は菩薩の仰せを畏まつて、行者と雲を聯ねて、流沙河の上まで來ると、水面に向つて、

『悟淨、經を取る人が來て居るのに、何故早く出て歸順せぬか？』

と大聲に呼はりました。怪物は之を聞いて水の底から姿を現はし、惠岸を見て、進んで禮をした。

『經を取る人は何處に居ます？』

『あの岸の上に坐つて居る人がそれだ！』と惠岸が指さしをして見せる。

悟淨は之を聞くと、急いで岸へ跑け上つて、三藏の前に跪き、

『弟子は眼が有つても節穴同然で、師父の尊容が目に入らず、失禮ばかり致しました。萬望、此の罪をお恕し下さい！』

『お前は誠心から佛門に歸依する心か？』

『弟子は先年菩薩の敎化を受けて、沙悟淨といふ法名まで賜はつて居ります。御敎へに從はないで何うしませう。』

三藏は沙悟淨の髪を削つて徒弟にし、沙和尙といふ別名を與へたので、悟淨は喜

んで三藏を拜し、又行者と八戒をも拜して、兄弟の約を結びました。其の時惠岸は悟淨に命じて、頸に掛けた九個の髑髏を取つて、索で繫ぎ、葫蘆を正中へ据ゑて、一雙の法船を造らせます。三藏は岸を下つて、葫蘆の上へ身を乘せると、ふわりと水面に浮んで、まるで舟へ乘つたやうな氣持がする。八戒と悟淨とは三藏の左右に立ち、行者は龍馬を牽いて後に從ひ、惠岸は雲の上から三藏を守護して、程なく流沙河を渡つて、無事に西の岸へ着きました。

惠岸は三藏が岸へ上るのを見ると、雲の上から、かの葫蘆を取戻しましたが、其の時早く其の時晩く、九つの髑髏は一道の陰風となつて消えてしまふ。三藏は惠岸を拜謝して、西の方へ進みました。

(六) 女菩薩

師弟四人は、流沙河を渡つた後は、大道について西へ西へと進みましたが秋も季になつた或日の暮方、何處かに宿を借るやうな家もあるかと思つて歩いて行くと、忽ち松林の中に一軒の家が見えるので、三藏は馬を急がして近寄つて

見ると、立流な門構の家で、如何にも富貴な人の住居と思はれる。三藏は馬から下りて、門の外で暫時立休んで居たが、中から誰も出て來る風がないので、性急な行者は、もう待疲びれて、門の中へ入つて見ると、正面に三間の應接間があつて、中間に山水の横披畫を掛け、其の前に香几を据ゑて、銅の香爐を載せ、廳の中には六脚の椅子が並べてあります。行者が入つて行くと廳後から中年の婦人が出て、嬌しい聲で、

『誰方？』と答める。『女ばかりの家を覗いては困りますね！』

『貧僧は東土大唐の天子の勅を蒙り、西方に往きて、佛を拜し、經を求める者ですが、一行四人が今日行暮れて、宿を尋ねて居るのです。』

『それなら皆樣にも、此方へお入りになるやうに仰有つたらいゝでせう。』と婦人は氣輕に承諾けるのでした。

行者が三人を呼んで來ると、婦人は廳から下りて出迎へた。八戒は目敏く婦人の容子を見ると、脂粉こそしないが、何處かに昔の色香が殘つて、まだ捨て難い風情がある。四人が席へ着くと、屏風の後から一個の女童が、黄金の盤へ白玉の器を載

せたのを運んで出て、一々に香茶を勸めました。婦人は又女童に向つて、齋の支度を命じたが、其の間に三藏は、婦人の姓と、土地の名を尋ねる。

『此處は東印度の地で、小婦は姓を賈と申し、夫の姓を莫といつて、家には萬貫の財と千頃の田地がありましたが、先年夫は三個の女兒を遺して逝なりました。』と言つて、婦人は一寸客の樣子を見て話を續ける。『三人の女兒も嫁けたいと思ひますし、小婦も夫を迎へて家業を續けて行きたいと思つて居る所へ、丁度長老方が下降になつたのも、何かの緣でございませう。』

斯う言つて婦人は話を斷つたが、三藏が聞かないやうな風をして、默つて居るのを横目で見て、言葉を續けた。

『小婦の家には水田が千頃あつて、牛や羊は數へ切れぬ程あります、又倉には米穀や、稜羅や、金銀が、一生使つても使ひ切れぬ程積み込んであります。師徒們はつまらぬ苦勞をして、西方までおいでになるよりも、寧そ此家に居て、思ふまゝに榮華を盡さうといふお考へにはなりませんか。』

三藏はそれでもまだ默つて、一言も言はない。

『小婦は亥年の生れで、今年三十六歳になりますが、大女は名を眞々と言つて、今年二十歳、次女は愛々と言つて十八歳、小女は憐々と言つて十六歳になります。三人共顏も醜くはありませんし、女の藝も一通りは仕込んであります。』と言つて婦人は四人の顏を覗き込んだ。『如何です、皆樣は寧そ髮を伸ばして、此の家の主人になつて下さるお心はありませんか？』

三藏は先刻からの話に、只呆れて、目を瞑つて、啞のやうに默つて居る。八戒は其の樣子を見て、一人でもどかしがつて居たが、とう〳〵耐らなくなつて、三藏の側へ躙り寄り、袖を抽いた。

『婦人があれ程に言ふのに、何故返事をなさらないのです？』

三藏は頭を擡げると、

『此の獣子が！』といきなり八戒を叱りつけた。『出家といふ者は、富貴に心を動かし、美色に意を留めるものではない。』

婦人は此問答を聞くと、顏色を變へて立上つたが、默つて奥へ入つて、腰門を閉ぢてしまひました。

八戒は心の中に三藏の無情を怨んで、ひとりでぶつ〳〵言つて居たが、

『斯うやつて灯火もなければ、茶の一杯も飲めない所で、一夜を過ごすのも、自業自得と諦めもしようが、可哀想なのは此の馬だ。何も吃はなかつたら、明日は人を乘せて走るのに差支へるだらう。どれ老猪が連れて行つて、草を飼つてやらう！』と言ひながら、韁繩を解いて出て行きました。行者は沙和尙に後を賴んで、蜻蜓になつて八戒の後を跟けて行くと、八戒は馬に草を飼はうともせず、大急ぎで後門の方へ廻りました。其の時婦人は、三人の女子と一緒に、後門の所で菊の花を眺めて居たが、八戒の姿を見ると、女子達は慌てゝ門の内へ隱れてしまふ。婦人は八戒を見て、『何方へお出でになります。』と言葉を掛ける。『長老們は我家に居て女聟になるよりも、乞食をして西の方へ住く方がお望みと見える。』

『師父は唐王の勅命を受けて經を取りに行く人ですから、君命に背く譯には行かないので、先刻のやうに言つたのでせう。』と八戒はにや〳〵笑ひながら言つた。『だが、私は此通り嘴が長く、耳が大きいので、屹度貴娘に嫌はれるだらうと思ふ。』

『否、そんなことは何とも思ひはしません。』と婦人は答へる。『家長のない所ですか

ら、長老が來て下されば結構なんです、もう一度行つて、師父に商量していらつしやい。』

『なに商量も何もありません。』と八戒が言つた。『生身の父母といふ譯ではなし、私の心一つで何うにでもなります。』

『それでは女兒達に話して見ますから。』と言つて婦人は後門を關ぢて入つて行つた。八戒は馬に草を飼はうともせず、韁繩を牽いて回つて來る。行者は此の樣子を見屆けて、先へ歸り、婦人と八戒との問答を話して居る所へ、八戒は馬を拉いて立回りました。

『馬に草を吃はして來たのか？』と三藏が何氣なく尋ねる。

『好い草がないので、放さないで來ました。』

『好い草がなかつたら、後門へ牽いて行けばよかつた。』と行者が言つた。

之を聞くと、八戒ははつと思つて、下を向いて默つてしまひました。

其の時不意に腰門が開いて、華やかな灯の光が、颯と室へ流れ込む、と見る間に先刻の婦人が、三人の女兒を連れて入つて來た。婦人が女兒們の名を呼んで經を

取る人を拜せよといふと、三人の女兒は師弟の前へ進んで禮拜する。其の姿の美しさは、天女の下降つたやうです。三藏は掌を合せ、頭を低れて、之に答へたが、行者は別に取合ふ風もなく、沙和尚は背を向いて立つて居ました。併し八戒は女の顏を見ると、まるで魂の拔けた人のやうに、恍惚となつて見詰めて居た。やがて禮拜がすむと、婦人は女兒們を奥へ引込ませた。

『婿になつて下さるのは那の長老です？』

行者は席を起つて、一手に八戒の手を握り、一手に婦人の袖を扯いて、

『後門でもう談合はついてゐる筈だ。さア〳〵婿さんを連れてゐらつしやい。』と言つて八戒を婦人の方へ突き遣つた。『我們にはお祝の酒でも振舞つて下さい。』

婦人は八戒を連れて奥へ入ると、間もなく女童に齋飯を運ばせて來たので、師弟三人は、ゆつくりと齋飯を濟まして、安らかな一夜を過ごしました。

* * * * *

八戒は婦人の後に跟いて、右へ折れ、左へ曲り、數知れぬ房を通つて、やう〳〵内堂へ入ると、何よりも先に、自分の妻になる女兒のことを尋ねます。

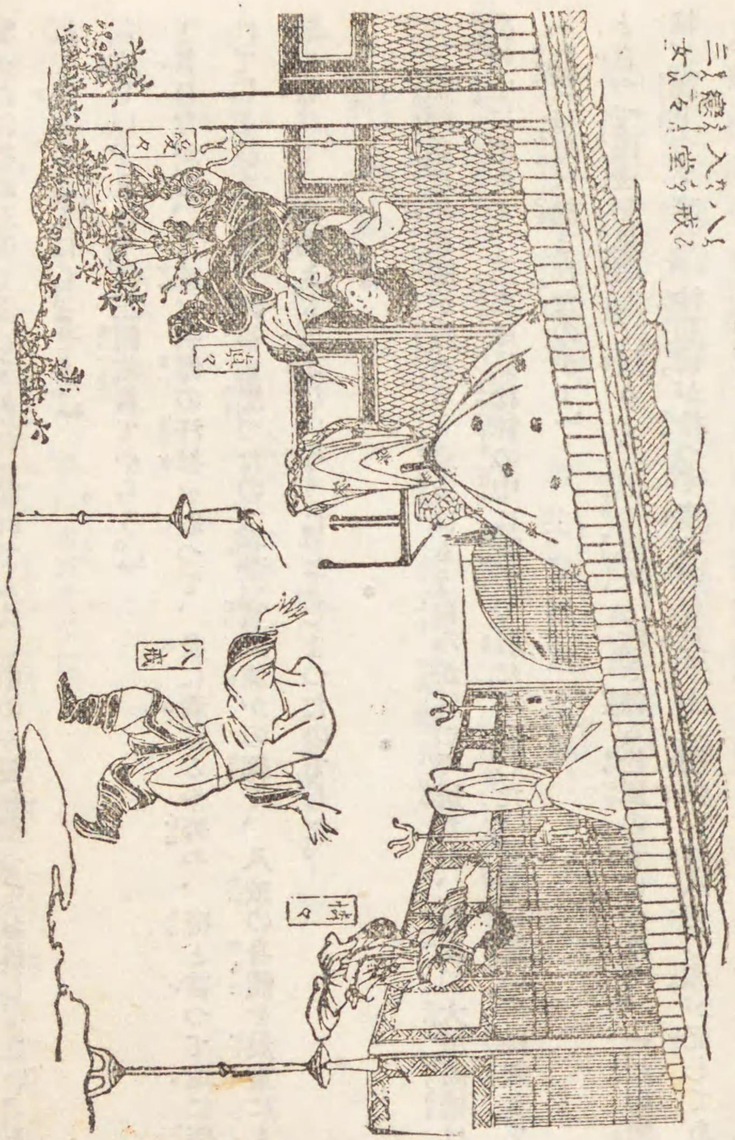
『さア、それには小婦も困つて居るのです。』と婦人が答へる。『大女に定めたら、二女が妙に思ふだらうし、二女にすると、三女が妙に思ふだらうし、三女を配げますと大女が妙に取るだらうと思つて、定めかねて居るのです。』

『それなら寧そのこと三人共頂きませうか。』と八戒は眞面目に言つた。

『御笑談仰有つちやいけません。』と婦人が言つた。『それでは斯うしませう、此の手帕を頭から被つて、顔を遮してゐらつしやい、小婦が女兒們に命けて、長老の前を通るやうにさせますから、長老の手へ觸つたのを配げることにしませう。』

八戒は婦人の言ふ通りに手帕を被つて、兩手を擴げて、待つて居ると、婦人は女兒們の名を呼んで『早く來て婿を定めなさい』といふ。やがて珮玉の鳴る音が聞えて、女子の往來する氣配がするので、八戒はもう夢中になつて、手を擴げたまゝ盲搜に摸り廻るうちに、頭が眩暈して、右に左に蹌踉きながら、柱に抱付いたり、壁に撞着つたり、顔も手足も傷だらけにしてしまつた。八戒はとう〳〵地に坐つて、苦しい息を吐きながら、『はしこくて到底捉まらない！』

『女兒がはしこいのではないが』と言つて、婦人は笑ひながら八戒の顔から手帕を



取る。『みんな羞しがつて接近かないのです。それでは斯うしませう、爰に女兒們の製へた汗衫が三領ありますから、孰れでも此の中の一領を擇つてお召しなさい、それで定めることにしませう。』

『宜しい、それでは三領共着てやらう。』

と言ひながら、八戒は一領の汗衫を取つて、身に着けるや否や、噫と言つて地に倒れてしまひました。汗衫と思つたのは其の實幾條かの繩で、八戒の身體を幾重にも緊め着けて、身動きも出來ないやうにしてしまつたのでした。

* * *

三藏師弟は不圖眼が覺めると東方はもう白みかゝつて居たが、昨夜の大厦高樓は夢の中に消えて、三人は只松林の中に睡つて居たのでした。三藏は驚いて跳起きて

『昨夜は鬼に魅まれたのか！』

と言つて四邊を見廻して居ると、忽ち颯々と吹き渡る松風の音につれて、一枚の簡帖が飄下つて來た。沙和尚が拾つて來たのを見ると、簡帖には八句の頌が記してある。

黎山老母不レ思レ凡、　南海菩薩請二下山一、
普賢文珠皆是客、　化成二美女一在二林間一、
聖僧澹漠禪機定、　八戒貪レ淫劣性頑、
從レ此洗レ心須レ改レ過、　若生二怠慢一路途難、

三藏は讀み畢ると、忙しく合掌して、禮拜し、二人の徒弟に簡帖を示して、

『四菩薩が我們の禪機を試したのだ』と言つた。『矢張鬼の業ではなかつた！』

此の折柄林の奥で、

『助けて下さい！　助けて下さい！　あゝ疼い！　あゝ苦しい！』

といふ聲が聞えるので、三藏は二人の徒弟を見て、

『あの聲は八戒だ！』と言ふ。

『如何にも！』と沙和尚が答へる。

『かまはずに置いて行きませう。』と行者が言つた。

『いや、獣子ではあるが、菩薩の御意に叶つた奴だ。』と三藏は悟空を宥めるやうに言つた。『救つてやるがよい。』

三人は林を分けて進むと、とある松の樹の枝に、繩で吊されて、八戒は苦しさうに叫喚んで居る。

行者は進み寄つて、笑ひながら、

『やア、お婿さん、昨夜は何んな工合だつた？』

と冷嘲しかゝるので、八戒は面目なげに牙を咬んでじつと、疼さを忍んで居ると、沙和尚は見るに見かねて、忙いで繩を解いて助け下してやりました。行者は尚も面目なさに差俯向いて居る八戒の顏を覗き込んで、

『おい、あの婦人の素性を知つてるかい？』

と尋ねる。

『目が昏んで居て、それ所ぢやなかつた。』

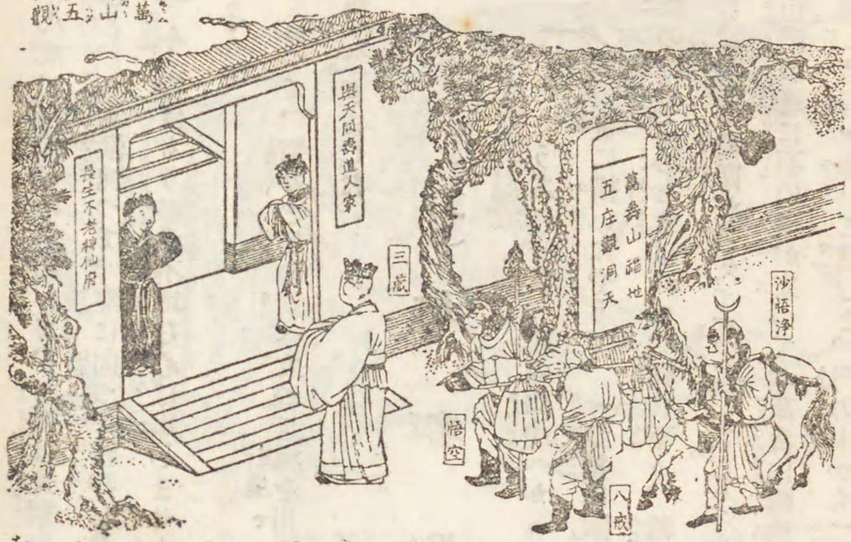
と八戒が答へるのを聞いて、行者は先刻の簡帖を八戒の手へ渡す。八戒はそれを讀むと、愈慚愧つて、空に向つて禮拜した後、三藏の前に跪いて、

『今後はもう必ず不埒な心は出しません、何處までゞも荷物を背負つてお供致します。』

と言つて、悄々と馬の前へ立つて林を出ると、行者と沙和尚も左右に隨いて大路を西へ急ぎました。

(七) 人參果

行くうちに一日一座の山中へかゝりましたが、此の邊の山水の景色は、宛然畫に描いたやうで、一歩毎に眼前の風景が變化して行くので、三藏法師は此の絶景に心を奪はれて、谿に下り、峰を傳つて進むうちに、忽ち一簇の林の中から、數層の樓閣が聳えて居るのが目についたので、三藏は近づいて馬から下りると、山門の邊に石の碑が立つて、『萬壽山福地五莊觀洞天』の十字が鐫付けてあります。四人は馬を牽いて進むと、門の中から二人の童子が出て、恭々しく迎へて正殿へ通

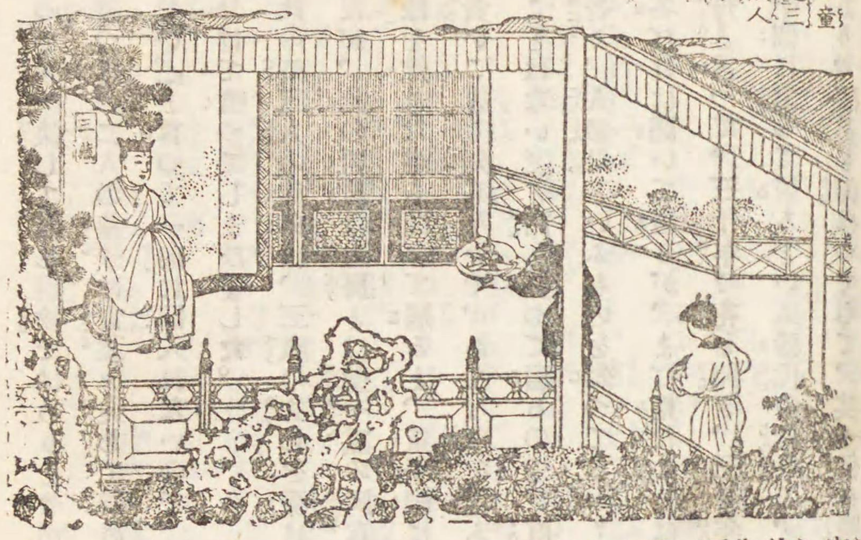


しました。童子は茶を勸めた後、三藏に向つて尋ねた。

『老師父は西天へ經を取りに往かれる唐の三藏法師ではありませんか？』

『貧僧は如何にも三藏だが、仙童は如何して貧僧の名を御承知なのか？』

『我師は號を鎮元子、混名を與世同君と申しますが、今日、元始天尊の請待を受けて彌羅宮へ參られる時、弟子們に分付けられるには、近日舊友が此處を通る筈になつて居る、名を唐の三藏といひ、原は如來の第二の徒弟金蟬子と號して、五百年前に我と相識になつた者だが、今西天に上つて佛を拜し經を求める途中に居るから、若し立



寄られた節は、必ず粗忽のないやうに款待せよと言ひ置いて行かれました。』と童子は事の次第を話して、『只今粗果を取つて奉獻げますから、暫く御休息下さい。』と言つて出て行きましたが、少時すると二個の果を、盤に盛つて、三藏の前に運び、

『觀の中には奉獻げるやうなものもありませんから、此の果を召上がつて、咽喉をお濕し下さい。』

と言つて前に置く。見ると、生れたばかりの孩兒ですから、三藏は驚いて、

『今歳は豐年だといふのに、此の觀の中では人を啖ふとは何事だ。』

『此物は人參果と申して、樹の上に生る

ものです、決して怪しい物ではありません。』

と言つて、二人の童子は言葉を盡して勸めたが、三藏は『樹の上に人間の生る道理がない。』と言つて一向に聞入れないので、童子們も餘儀なく道房へ持回つて、二人で分けて喰つてしまひました。

此の時三人の徒弟は、三藏の許しを受けて、厨房へ廻つて食事の支度をしてゐましたが、此の厨房は道房とは壁一重の隣なので、童子們の話がよく聞えます。八戒は飯を炊きながら聞いて居ると、童子們は人參果を啖ひながら、『あの唐僧は人參果の貴いことも知らないで、あんな事を言ふが、お陰で我們の口へ入つて、こんな旨いことはない。』と話し合つて居るので、直に外へ出て行者に向ひ、

『哥々、人參果といふものを知つてるか？』と尋ねる。

『名だけは聞いて居るが、まだ見たことはない。』と行者が答へた。『人參果は一名草還丹と言つて、三千年で花を開き、三千年で果を結び、三千年で成熟し、其の果は三十個に限つて居るといふ稀代の珍果で、形は生れたばかりの孩兒に宛然で、手足もあり、眼鼻も備はつてゐて、其一個を啖へば、四萬七千年の壽を得ると言ひ傳へ

る。』と言つたが、八戒の顏を見て『そんな物が何處かにあるのか？』

『此處に在るんだ！』と言つて、八戒は二童子の話して居たことを殘らず話した。『何うかして一個宛手に入れる工夫はないか？』

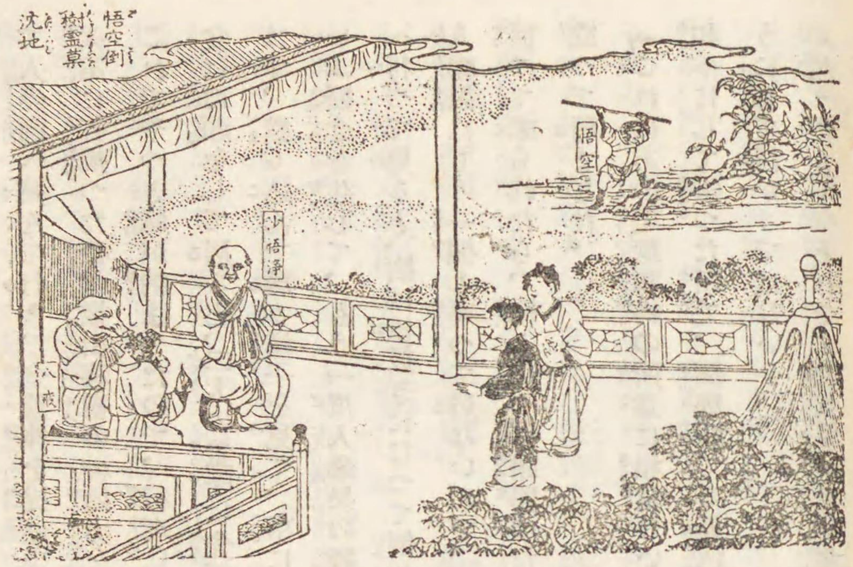
『なに譯はない、行つて取つて來てやらう。』と行者は早速に請合つて、隱身の法を使つて道房へ入つて見ると、牕の上に二尺許りの金の擊子が掛かつて居る。行者は之が人參果を打落す道具に相違ないと思つて、手に取つて、道房を出て庭へ廻つて見ると、花園の後に小門があつて、門の中に一株の大樹が、枝を擴げ、葉を重ねて陰森と茂つて居る。樹の高さは千尺を超え、根下の太さは周圍七八丈もあつて、宛然芭蕉のやうな廣葉の間に、生れたての孩子其體な果がぶら下つて居るのが見えます。行者はこれが噂に聞いた人參果に相違ないと思つて、する〳〵と樹を登つて、手に持つた金擊子で其の一個を打落すと、地へ落ちた樣子だから、行者は直に樹から跳下りて其邊を尋ねたが、何處へ行つたものか、影も形もありません。行者は不思議に思つて、咄嗟に思案して、唵字の呪文を唱へて、土地神を呼び出した。

『今の人參果はお前が隱したのだらう？』と尋ねる。

『何で小神が隠しませう。』と土地神が言ふ。『それは大聖が此樹の事を御存知ないからです。此樹は天地開闢の初めから此處に根を下しましたもので、四大部洲を探しても、此五莊觀より外には何處にもありません。此人參果は五行を畏む性質がありまして、金に遇へば落ち、木に遇へば枯れ、水に遇へば化し、火に遇へば焦げ、土に遇へば潜つてしまひます。ですから打落す時には必ず金の道具を用ひ、それを受けるには盤を用ひるのです。大聖はそれを知らずに、土の上へお落しになつたので土の中へ吸込まれてしまつたのです。』

此話を聞くと行者は土地神を回して、又樹へ登り、今度は片手で擊子を使ひ、片手で直綴の襟を擴げて、三個の果を懐の中へ落して、厨房へ歸り、金擊子を牕の格子から投込んで置いて、三人で一箇宛分けて吃ひました。

此の時二人の童子は道房の中から、壁越しに三人の話を聞き、又金擊子が落ちて居るのを見て、急いで人參園へ行つて見ると、果して四箇の果が紛失して居るので、直に正殿へ來て散々に三藏を罵り立てました。三藏は驚いて理由を質すと、弟子們が人參果を偸んだといふので、直に三人を呼んで詰問すると、行者は進み出て、



『實は先刻八戒が此の童子們の吃ふ所を聽いて居て、一個吃ひたいと申しますので、弟子が三箇だけ打落して來て、三人で一箇宛分けて吃ひました』と言ふ。

童子們は之を聞くと、側から口を出して『四箇偸んで置きながら、三箇だといふのは何うしたのだ。』と咎める。

八戒も聞咎めて、不平を並べると、童子們は證據を押へて愈々罵り騒ぐので、短氣な行者はぐつと癪に觸つて、『煩い小僧奴が、果物の三つや四つで、それ程に騒ぐなら、寧そ心殘りのないやうに根こそぎ無くなして呉れよう。』と早速一根の毛を拔いて自分の身代りに立たせて置いて、眞身は雲へ駕つ

て人參園へ飛んで行き、金箍棒を提げて樹へ登るや否や、枝葉の差別なく、手當り次第に打拂つた後、推山移嶺の神通力を出して、一推しに樹を推倒してしまつた。これでやつと胸が納まつたので、行者は再び原の所へ飛回り、毛を體へ戻して、何食はぬ顔をして居ると、二人の童子は先刻からいくら罵つても、行者がぷつりとも言はず、默り込んで居る樣子を見て、事に依つたら自分達の勘定違ひかも知れないといふ疑念を生して、もう一度人參果の數を査べに出て行きました。童子們は人參園へ行つて見ると、樹は根扱ぎになつて倒れて居て、枝も葉も滅茶々々に敲き落され、人參果はもう一個も殘つて居ないので、二人は膽が潰れるばかりに驚いて、『師父が回つて來られたら、何といつて謝罪つたものか。』と、童子們は思案に暮れて茫然と立つて居ました。

『これはあの毛臉和尙の所爲に相違ない。』と童子の一人が言つた。『併しあの四人を相手にして爭つた所で、到底勝てる見込はないから、師父の回るまで逃がさないやうにして置かうではないか。』

『然うだ〳〵、それでは彼奴等が飯を食つてゐる間に、外から錠を鎖して出られないやうにして置かう』と他の童子が言つた。

二人は斯う相談を定めて正殿へ回つて來たが、やがて師弟が齋飯に着いた暇に、正殿の門を關し、外から錠を掛けて罵り立てた。

『此の賊僧、人參果を偸んだばかりか、世界に二つとない仙樹までも推倒すとは、重ねぐ〳〵の極惡人だ。そんな根性で、西方まで往つて佛が拜せると思ふのか。』

三藏は之を聞いて、心の底で悟空を怨んだ。

『此猴、貴樣はよく事を起す奴だ！　出家の身として、他人の果を偸み吃ふさへあるに、樹まで推倒すとは何事だ！』

『師父、御心配には及びません。』と行者は平氣な顔をして言つた。『あの小僧們が睡つたら、すぐ爰を出掛けませう。』

彼是するうちに東方へ月が昇りました。此の時行者は『さア、宜し！』と言つて立上つたが、金箍棒を門の方へ差向けて、口の中で何か呪文を唱へると、門の錠前はばらりと落ちて、門は自然に開きました。行者は先づ八戒、沙和尙の二人を三藏に附けて先へ行かせ、自分は一足後に殘つて、二人の童子の室へ行き、窓の格子から

中を覗くと、二人はまだ睡らずに居る樣子でした。行者は二本の毛を拔いて瞌睡蟲に變じ、格子の間から放してやると、蟲は直に飛んで行つて、二人の臉へ止まるや否や、童子們は宛然死んだやうになつて睡つてしまひました。行者は其の樣子を見届けて毛を身へ收めると、三人の後を追つて五莊觀を立去りました。

(八) 鎭元大仙

一二藏師弟が五莊觀を逃出して、道を急いで、西へ西へと進んで行く間に、鎭元大仙は彌羅宮の會を濟まして、衆くの弟子と共に、五莊觀へ回つて來たが、見ると山門は開放したまゝになつて、殿上には香の烟も絕えて居る。大仙は不審に思つて、童子の房へ行つて見ると、扉が堅く閉つて、中では二人の童子が前後も知らずに睡つて居ます。大仙は扉を拗開けて中へ入り、床から扯下して來たが、二人はまだ目が醒めないので、

『これは誰かに法をかけられたものに相違ない』と言つて、大仙は弟子に命じて水を持つて來させ、口の中に呪文を唱へて一口の水を臉へ噴掛けると、二人はやう〳〵

目を醒まして、きよろ〳〵と身邊を見廻して居たが、急に大仙の前へ跪いて、わつと哭き出しました。

『師父の故人の唐僧といふのは大變な盜賊でした。』と童子は泣きながら言つて、代る〴〵始終の事を訴へる。

大仙は靜と聽いて居たが、

『よし〳〵、哭くことはない〳〵。』といつて童子を宥め、『お前達は知らないが、あれは孫悟空と言つて、前に天宮を鬧がしたことのある神通廣大な仙人なのだ。併しあの樹を打倒して行つたと聞いては、此儘には濟まされない。』

斯う言ふや否や、大仙は二人の童子を連

れて、雲に駕つて三藏の後を赶ひました。

＊　＊　＊　＊　＊

三藏法師は、三人の徒弟と、道を急いで、五十里餘りも來たと思ふ頃、暫時樹蔭へ入つて息を休ませて居ると、前方から一人の行脚僧が來て、麈尾を搖ひながら樹の下へ進んで、三藏に禮を施した。

『長老には何方から來られた？』

『貧僧は東土大唐から派遣されて、西天へ往つて經を取る者です。』

『長老は東から來られたといへば、萬壽山五莊觀へ立寄つて來られたでせうな。』

之を聞くと行者は忙しく答へた。

『一向に氣がつきませんでした、路について眞直に來たものですから。』

すると行脚僧はから〳〵と笑つて、

『此の潑猴、誰を瞞すつもりだ！』と行者に向つて言つた。『觀へ立入つて、人參果の樹を打倒し、連夜此處まで逃げて來たのは誰だ！さア快く樹を元通りにして還さないか。』

行者は之を聞くと、いきなり鐵棒を揮つて、大仙に打ち掛つたが、大仙は身を躱して引外すと、雲を踏んで空へ上り、忽ち本相を現はし、麈尾を振つて、行者の鐵棒をあしらひながら、袖裡乾坤の法術を使ひ、雲の上から袍の袖を展げて、四人の僧を馬と一緒に引包んで、一飛に觀の中へ回りました。

五莊觀へ回ると、大仙は四人を袖から撮み出して、小仙に命して一個一個に柱へ縛らせ、龍皮で作つた七星鞭で打たせます。小仙は鞭を執つて立ちかゝりながら、

『師父、那の和尙を先に打ちませう？』と尋ねる。

『三藏が尊大無禮だ、先づ彼れから始めるがよい。』

之を聞くと、行者が遮つて言つた。

『先生、それは差ふ。果子を偸んだのも、樹を推倒したのも私です。何で最先に私を打たないのです？』

『うむ、それも一理だ』と大仙は笑つて言つた。『それでは彼れを先に打つがよい。』

『幾個打ちませう？』と小仙が尋ねる。

『然うさな。』と大仙は一寸考へて『果の數だけ、三十打つがよい。』

徒弟の仙人が鞭を揮上げて行者の腿を打たうとすると、行者は咄嗟に兩方の腿を鐵に變じて、自由に打たせて置きました、三十の數だけ打つてしまふと、大仙は又命じた。

『今度こそは三藏を打て！平生の敎訓が宜くないので、徒弟が勝手なことをするのだ。』

小仙は又鞭を揮上げて三藏の方へ寄つて行くと、行者は再た聲を掛けて遮つた。

『先生、それも差ふ。果子を偸んだのは師父の知つた事ではない。又從令師父に罪があるとしても、弟子が替りに打たれるのが本當だ。さア、もう一遍私を打つて下さい。』

『此の猴、狡猾な奴だが、感心に禮を知つて居る。』と大仙が言つた。『そんなら、矢張彼れを打つがよい。』

小仙は又々行者の腿に三十鞭を與へたが、行者は疼いとも痒いとも思はなかつた。

此の時日は疾うに西に沈んで、四邊が暗くなりかゝつて來たので、後は明日の事にしようと言つて、仙人們は銘々に自分の房へ入つて寢てしまつた。

三藏は兩眼に涙を浮べて、三人の徒弟に怨みを言ふと、行者は師を慰めて、

『師父、安心してゐらつしやい、直に又出掛けますから。』

と言つたが、やがて人々の寢靜まつた頃を窺ひ、行者は身を細くして索を脫け出し、三人の索を解いて、八戒に柳の樹を四本伐らせ、枝を拂つて、之を柱へ縛りつけて置いて、口の中に呪文を唱へ、舌の尖を咬んで、其の血を柳の樹に噴きかけると、忽ち師弟四人と少しも差はない人間になりました。其處で三人は庭へ繫いであつた馬を牽出して來て、三藏を乘せ、行李をまとめて五莊觀を出ると、又々夜を徹して西の方へ走つて行きました。

翌朝大仙は早く起きて、小仙に命じて三藏師弟を打たせました。小仙は三藏を手始めとして、八戒、沙和尙といふ順で、各三十鞭を與へたが、最後に行者を打たうとすると、四人の僧は忽ち變じて、柳の幹になつてしまひました。小仙は驚いて此の由を大仙に告げると、大仙は笑つて、

『孫行者は面白い奴だ！身替りに柳の樹を縛つて行つたか。』と言つたが、『どれ、もう一度捕まへてやらう、逃がしてなるものか。』

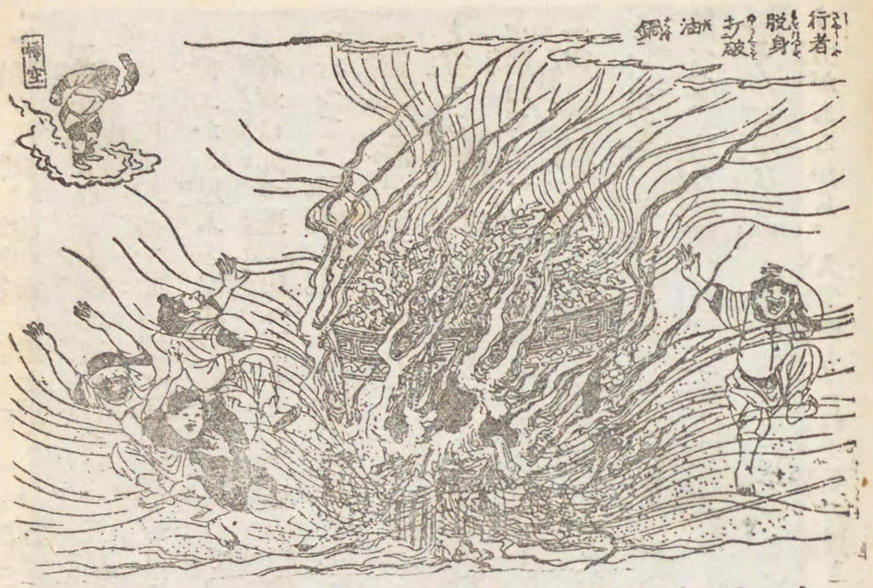
と大仙は雲に駕つて追つて行つたが、少時して追着いて、雲の上から大音に、

『孫行者待て！』と呼はつた。『逃げたくば人參樹を還して行け！』

之を聞いて行者、八戒、沙和尚の三人は、大仙を中に包んで、三方から打ちかゝつたが、大仙は又もや袖を展げて、四人の僧を馬諸共に引包んで觀へ回り、袖から出して一個一個に索で綑げ、衆仙に指圖して、大鍋を庭に据ゑ、油を煮沸らせて、孫行者を釜煠にする支度に掛りました。行者は之を見ると忽ち一計を案出き、側にあつた石獅を身替りにして置いて、自分は雲に駕つて見て居ると、四五人の小仙が立ち掛つて、行者を抱き上げようとするが、どうしても動かないので、だん〳〵に加勢がついて、終ひには二十人の力でやう〳〵に扛上げて、鍋の中へ投り込むと、底が拔けて油は皆な流れ出してしまひます。驚いて中を覗くと、鍋の底には、行者と思ひの外、大きな石獅が轉がつて居るので、大仙は大に腹を立て、

『猴め、こんな狡計をするとは無禮な奴だ！』と怒鳴つた。『此の腹癒せには鍋を換へて三藏を煑殺せい！』

行者は之を聞くと忙いで雲を下り、大仙の前へ進んで、



『師父を煑ることだけは許して下さい。』と言つた。『先刻も油の中で汗でも流さうと思つて居たのですが、急に小便が出たくなつたので、一寸小用に行つて來ました。さア　私を鍋へ入れなさい。』

此の時大仙は、呵々と笑つて、殿上から降りて來て、行者の手を執つた。

『お前の手並はよく分つた。人參樹を元の通りにして呉れたら、お前と兄弟分にならう。』

『師父と兄第の索を解いたら、あの樹を元通りにして還しませう。』と行者が答へる。

其處で鎮元太仙は小仙に命けて、三藏

東洋海

を始め八戒、沙和尚の索を解くと、行者は三藏の前に跪いて三日の暇を願ひ、

『弟子はこれから東洋海へ往つて、三島を遍歴り、仙人を尋ねて、起死回生の法を求めて來て、必ず此の樹を活かしてお目に掛けます。』

と言ふかと思ふと、はや觔斗雲に騰つて、東海を指して飛んで行きました。

行者は先づ蓬萊山へ下り立ち、松の樹陰で福、祿、壽の三星が碁を打つて居る所へ行つて、仔細を話して、樹を活かす方を尋ねると、三老も思案に餘つて、

『靈樹を活かす方はない！』

と答へる。行者は三老に別れて、方丈山に東華帝君を尋ね、又瀛洲島に九人の仙翁を尋ねて、一々に樹を活かす法を尋ねましたが、何處でも、

『禽獸の類ならば、生命を回す法もあるが、樹を活かす方は知らない！』

といふので、行者は最後に南海の落伽山へ行つて、觀音菩薩を拜し、此回の次第を陳べて、助力を賴むと、菩薩は早途承引けて、

『そんな事なら早く來ればよいに！』といふ。『此の淨瓶の中の甘露水は樹木を活かす力があるから、人參樹もこれで元の通りになるだらう。』

行者はやう〳〵胸を撫で下して、觀音菩薩の後へついて五莊觀へ回つて來ると、一同が階を降りて菩薩を拜し、やがて菩薩に隨つて、人參園へ行きました。

觀音菩薩は倒れた樹の前に立つて、悟空を招き、楊柳の枝を瓶の中の甘露に蘸して、行者の手心に起死回生の符を畫き、手を握つて樹の根へ挿入ませると、須臾して其處から一道の清水が湧き出して來る。菩薩は仙童に命じて、此の清水を玉の杯へ汲取らせ、又行者、八戒、沙和尚の三人に命じて、樹を引起させ、楊柳の枝で玉杯の水を樹に洒ぎながら、口の中に呪文を唱へて居ると、枝にも葉にも、見る〳〵生命が通つて來て、黑く茂つた葉の間へ二十三個の人參果が、舊の通りに顯れました。大仙は之を見て大に喜び、直に金擊子を取つて數顆の人參果を打落し、正殿へ回つて、菩薩を始め、三藏の師弟に勸めますと、三藏も今は人參果の正體が分つたので、安心して其の一個を吃ひました。

其處で菩薩は一同に別れて、南海へ回りましたが、大仙は約束の通り行者と兄弟の義を結び、三藏師弟を引留めて、五日の間五莊觀で樣々に欵待しました。

人參樹

(九) 白骨夫人

三藏は五莊觀で人參果を吃つてから、俄に仙骨を生じ、身も心も輕々として道も自然に捗どりました。やがて一座の高山へ差掛かり、崖を上り、岨路を傳はつて馬を進めるうちに、日もやう〳〵傾いて來たが、食を乞ふべき人家もない。三藏は悟空を回顧つて、

『大分飢じくなつて來たが、何處ぞに齋飯を求める家はないか？』と尋ねる。

行者は直に雲へ跳上つて四方を看下すと、此の邊一帶に岩山續きで、近くには一軒の人家も見當らないが、遙か南の方に當つて一點の紅色が眼に留まつた。

『あゝ彼處に山桃が熟してゐる。』と行者は心の中に思ふ。『あれを摘んで來て差上げよう。』

斯う思ふと、其のまゝ南の山を指して飛んで行きました。

所が此の山には一個の妖精が棲んで居て、先刻から師弟の樣子を覗つて居たが、今徒弟の一人が、鉢を持つて齋飯を乞ひに出掛けたのを見ると、直に美しい女に

妖魔変女進美猿食

化け、青磁の瓶を手に持つて、徐かに師弟の方へ進み寄りました。三藏は怪しみながら、立停つて、前方を見てゐると、八戒は女と見てもう眠を細くして、釘鈀を放下したまゝ、急いで跑出して行つた。程なく八戒は女を連れて、三藏の前へ戻つて來て、

『師父、此の御人は佛のために齋飯を供養したいといつて來られたのです。』

と報告するので、三藏は女に向つて『何處から來たか。』と尋ねる。女は答へて

『此の山は白虎嶺と申しますが、私の家は此の峠を西へ下つた處にございます。父母を始め家内中の者が佛の敎を

守つて、慈悲善根に心を用ひて居りますので、今日も亡者の供養の爲に此處まで上つて參りましたのです。此處で師父にお目に掛るといふのも、何かの緣でございませう。何卒此の齋飯をお請け下さいませ。』

と言つて手に持つた器を差出すので、三藏はそれを受けて、口へ持つて行かうとする途端に、行者が歸つて來て、雲の上から跳下るや否や、如意棒を揮つて妖精を目掛けて打下しました。妖精は行者の回つた樣子を見ると、急に解屍の法を使つて、眞身は空中へ逃げ上り、女の屍骸を遺して置いたので、三藏はそんな事とは知る筈がなく、行者が女を打殺したこととばかり思ひ込んで、吃驚して行者の無法を咎めます。行者は笑つて、

『師父、これはみんな妖精の仕業です。妖魔が人の肉を吃はうと思ふ時には、こんな風にして人を誑かすのです。』と言つた。『若し御不審もありますなら、まア此の瓶の中を御覽なさい。』

三藏は言はれるまゝに磁器を取つて中を見ると、長尾蛆や蝦蟆の類が蠢々して居るので、驚いて顏色を變へる。八戒は側で此樣子を見て、口惜しさうに嘴を曲げて

三藏に向ひ、

『此の女は確かに此の邊の農婦で、決して妖怪なぞではありません。哥々に緊箍呪を唱へられるのが怖ろしさに、瓶の中の齋飯を、故意とこんなものに變じて師父の眼を瞞ますのです。』

と訴へるので、三藏はまた八戒の言ふことに動かされて、口の裡に緊箍呪を念じると、行者は頭を抱へて轉げ廻る。

『疼い、疼い！　何卒赦して下さい！』

『出家といふ者は時に方便を用ひることがあつても、假にも善心を離れてはならぬものぢや。汝のやうに然う無法に人を殺すやうでは、經を取つて來たからとて何の役に立たうぞ？』と三藏は行者を諭した。『汝のやうな者には用はない、此處から引返して疾く〳〵立回るがよい。』

之を聞くと、行者は三藏の前に跪いて、

『立回れと仰せられても、此處から引返しては、何時になつて師の大恩を報ゐることが出來ませう？　老孫は天宮を鬧がした罪で、如來のために兩界山へ壓へられて

居りましたのを、師父に救ひ出されながら、西天までお供もせずに、途中から立戻つたとあつては、後の世までも忘恩者と呼ばれませう。』

と涙を流して述懷するので、三藏も流石に憐憫を催して、

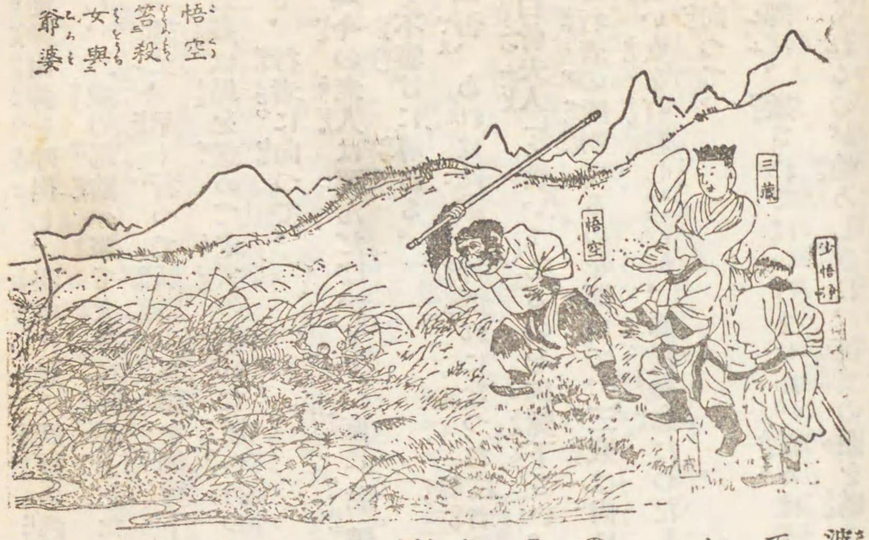
『然ういふことなら、今回だけは饒してやるが、二度とこんな無法をしてはならないぞ。』

と誡める。行者は喜んで先刻摘んで來た桃子を三藏に勸めて、又々山路を踏んで進みました。

さて又かの妖精は、一旦は脫れて空中へ上つたが、もう少しの所で、行者に見露はされたのが殘念でたまらず、何とかして此の師弟を誑かしてやらうと思ひ、今度は八旬以上の老婆になつて、竹の杖を突きながら、とぼ〳〵と歩いて來ました。八戒は三藏の袖を引いて、

『師父、彼處へ來るのは先刻の女子の母親に違ひありません。』と言ふ。『屹度女子を尋ねに參つたのてせう。』

『馬鹿な事を言ふな。』と行者は八戒を嗜める。『先刻の女子は十八歳位なのに此の老



婆は何う見ても八旬を越して居る。六十歳で子を產んだといふ話は聞いたことがない。此奴も妖怪に相違ない。』

行者は斯う言ふと、如意棒を提げて老婆の方へ跑寄つたが、近いて見ると果して前の妖精なので、唐突棒を擧げて打殺しました。妖精は今度も巧く身を脫けて、老婆の屍骸を置いて行つたので、三藏は驚き怒つて行者の亂暴を責め、緊箍呪を唱へて苦しめたが、行者は百方其罪を謝びて、やうやうに饒される。又少時行くと、妖精は尙ほも老翁の姿になつて出て來たが、行者は直に看破つて、『今度こそは脫さないぞ』と胸の中に思案を定めながら、呪文を唱へて

地神山神を呼出し、空中に居て妖精の逃路を塞がせ、棒を揮つて一打に老翁を打倒し、三藏の馬前へ來て大聲に叫びました。

『師父、早く行つて妖精の正體を御覽下さい！』

三藏は馬を進めて老人の倒れた所へ行つて見ると、只一堆の白骨があるばかりなので、行者に向つて、

『今の老人は死んだばかりで、直に骷髏になつたのか？』

と不審げに尋ねる。

『否、あれは此處で行倒れになつた亡者の魂魄が妖をしたのです、此の脊梁の上に「白骨夫人」と書いてあるのを御覽下さい。』

と行者の說明するのを聞いて、三藏は尙ほも半信半疑で居ると、八戒は先刻行者が若い女を打殺したのが、餘程殘念だつたと見えて、長い嘴を捩ぢ曲げながら、三藏に向つて、

『師父、欺されてはいけません。哥々は三人も人を殺して置きながら、緊箍呪を念じられるのが怕ろしさに、師父の眼を瞞まさうと思つてこんな事をしたのです、み

んな哥々の妖術です。』といふ。

之を聞くと、三藏は又もや八戒の言ふことを信じて、緊箍呪を唱へて行者を苦しめた上、

『汝は今日續けて三人を打殺した。然ういふ惡心が改らないやうでは、到底此の先見込はないから、今のうちに回るがよい。』と申渡す。

行者は之を聞いて、

『否、今のは妖精に相違ないのです。老孫が妖精を殺して、師父の危害を除くのに、師父には獸子の讒言を信じて、却つて再三老孫を逐ひ拂はうとなさるのは餘りです。併し諺にも「三度目正直」といひますから、私もこれで諦めて仰せに從ひます。』

と言つたが、三藏の顏を見ると思はずはら〳〵と涙を流して、『兩界山で師父に救はれてから以來、深山幽谷を分け、千辛萬苦を積んで、無事に此處まで參りましたが、今此處でお別れするのかと思ふと、「鳥盡きて弓藏まり、兎死して狗烹らる」といふ言葉も思ひ合はされて、殘念でなりません。』といつて尙ほも三藏の心を動かさうとする。

金角銀角

三藏は行者の言葉を耳にもかけず、筆を取つてすら〳〵と一葉の破門狀を認め　行者の手に渡し、

『之を持つてとつとと行け！今日からはもう徒弟でもない、師でもない！』

と言渡したので、行者も今は詮方なく三藏を拜して別れを告げ、沙和尙に向つて

『賢弟、お前に言つて置くが、若し途中で妖精に會つて、師父を奪はれるやうなことがあつたら、必ず孫悟空といふ徒弟があると言ふがよい、西方の妖怪も、俺の名を聞けば、師父に害を加へることはあるまい。』

と吳々も言遺して置いて、觔斗雲に駕つて花果山へ回つて行きました。

第四　金角銀角

(一)　破月洞

三藏法師は、一旦の憤怒に、孫行者を追放した後、再び馬に上つて西に進み、白虎嶺を過ぎると、一帶の深林へかゝりました。八戒が釘鈀を使つて路を開きながら、進んで松林へ來ると、三藏は八戒に向つて、

『大分飢じくなつたが、何處かへ行つて齋飯を求めて來い。』と命じました。

八戒は鉢を持つて、西の方へ十里餘りも走つたが、一軒の家も見當らないので、落膽して、路傍の草の中で一休みするうちに、急に睡氣がさして、其のまゝぐつすりと寢込んでしまひました。

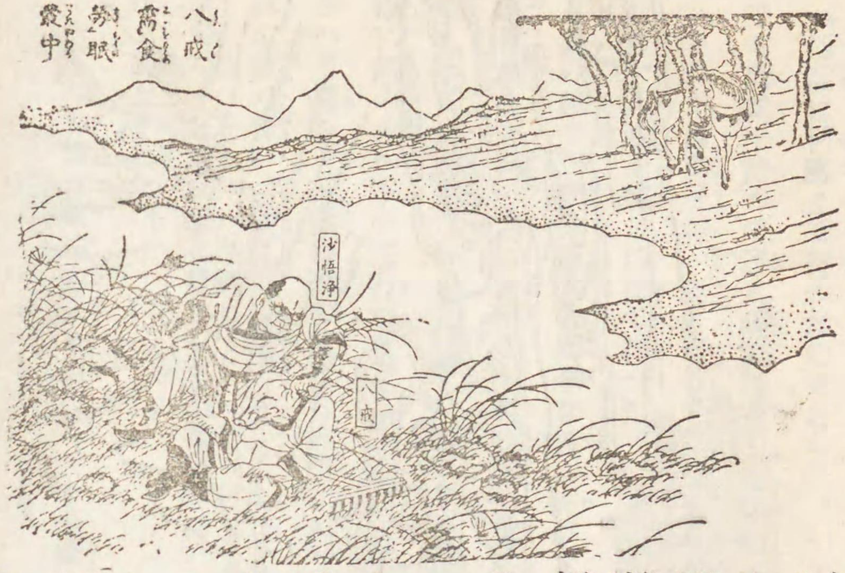
三藏は松林の中で八戒の歸來を待つて居たが、待てど暮せど、回つて來ないので、沙和尚を見て言つた。

『悟能は何處まで行つたのであらう、もう日も大分傾いて來たが、斯うして何時までも此處で待つて居る譯には行くまい。』

『それでは弟子が一走り行つて見てまゐりませう。』と言つて、沙和尚は寶杖を手にして、八戒を搜しに出て行つた。

其の後で三藏は兩人の回來を待ち詫びながら、林の中を彼方此方と歩いて居たが、不圖見ると南の方に當つて一座の塔が見える。三藏は心の中で、『塔があるからには寺もあるに相違ない、どれ兩人の歸るまでにあの塔を拜して來よう。』と思ひながら徐に塔の方へ下つて行つた。やがて塔門の處まで行くと、門の裡面には班竹の簾が掛かつて居る。三藏は何の氣なしに門を入り、簾を揚げて内へ入らうとすると、石の牀に臉の青い、牙の長い妖魔が睡つて居るので、吃驚して、門の外へ逃出しました。其時早く妖魔は眼を覺まして小妖を呼び、直に三藏の後を赶はせて、捉へて縛りつけて置きました。

さて沙和尚は八戒の後を追つて、十里餘りも進んだが、一向に人の姿も見えないので、とある丘へ上つて四方を眺めると、直き足許の草の中で何か人の聲がする。



和尚は杖を伸ばして、其邊の草を搔き分けて見ると、獸子が其處へ睡り轉けて、何か寢語を言つて居るのでした。和尚は腹を立てゝ、唐突八戒の耳躲を掴んで引起し、急いで松林へ回つて見ると、三藏の姿が見えません。沙和尚は驚いて、

『それ見ろ、貴樣があんな所爲をして居るので、師父は妖魔に攫はれてしまつたではないか！』といつて八戒の怠慢を責める。

『此林の中は清々してゐて、妖魔が居さうもない。』と八戒が笑つて答へる。『屹度其邊で景色でも眺めて居られるのだらうから、急いで搜しに行かうよ。』

兩人は馬を牽き、行李を擔いで、松林を出て、其の邊を尋ね廻るうちに、かの塔の前へ出ました。見ると塔の門は緊く閉つて、門の上には白い石に『碗子山破月洞』といふ六字が鐫着けてある。八戒は釘鈀を振上げて門前へ進みながら、大聲に、

『門を開けろ！』

と叫ぶと、中から一個の妖魔が、大刀を提げて跳り出で、兩人を相手に戰つた。

此時三藏は洞の中に縛られて居ると、洞の奥から一個の婦人が現はれて、

『長老は何うして此處へ連れて來られたのです。』と柔しく尋ねる。

『吃ひたくば早く吃つたがよい。』と三藏は觀念の目を瞑つて答へる。『何ももう尋ねるには及ばない！』

『私は決して人を吃ふやうな者ではありません。』と婦人が言つた。『此處から三百餘里も行つた處に寶象國といふ國があります。私は其の國王の第三の公主で名を百花羞と申しますが、丁度十三年前の中秋の夜のことでした。庭へ出て明月を賞して居りますと、一陣の狂風が起つたと思ふ間に、私の身は妖魔の手に捉まれて、此處まで攫つて來られたのです。爾來十三年の間心にもない妖魔の妻となつて、兩

妖魔猪沙
熊戰雲中。

個の兒まで生みましたが、父母の事を思ひ出さぬ日は一日もありません。』と言つたが『長老は何方から來しつたのです？』と又尋ねる。

之を聞いて三藏は徐に眼を開いて、

『貧僧は唐王の勅命を受けて西天へ經を取りに住く者ですが、思ひもよらず此處へ來て此樣な憂目に遇ひました。』

『經を取る人とあるからは、必ずお求ひ申します。其代り、寶象國はこれから西へ往く路に當りますから、何卒私の書簡を父母の手へ屆けて、私の此處に居りますことをお傳へ下さいまし。』

三藏が點頭くのを見て、公主は卽座に

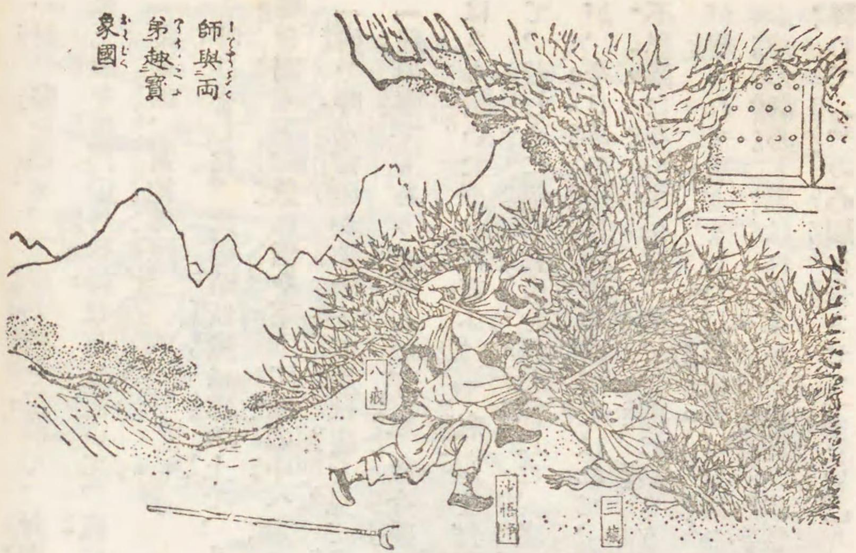
一封の書を認め、三藏の繩を解いて、封書を渡し、後門の方へ連れて行つた。公主は三藏を後門の外へ待たして置いて、直に取つて返し、塔門の外へ出て、

『黃袍郎、黃袍郎』

と呼びました。此の時妖魔は雲の上で、八戒、沙和尙を相手に戰つて居たが、妻の聲を聞くと、急に雲を下りて洞の中へ入つて來る。

『何で呼んだのか？』と妖魔は妻を見て尋ねる。

『別の事でもありませんが、私は今睡つた間に不思議な夢を見たのです。』と公主はさも驚いたやうに言ふ。『私がまだ宮中に居ります時分に、一つの心願を立てて、若し心に適つた夫を得た節には、名山に上つて僧に布施をしようと誓ひましたが、今日夢の中に金甲の神が現はれて、私の誓に背いた罪を責めるのです。餘り不思議な夢ですから、直ぐ貴郎に話さうと思つて出て來ますと、彼處に一個の和尙が縛られて居りました。夢の告げを思ひ合せて見ますと、私にあの僧を救へといふ神の御心と思はれますが、貴郎が本當に私を愛して下さるなら、何卒あの僧を釋して私の心願を果させて下さい。』



妖魔は之を聞いて、

『お前がそれ程に言ふなら釋してもいい、繩を解いて後門から出してやれ！』

と言ひ棄て、又兩人の方へ取つて返し、

『汝等兩人の僧よく聞け！　汝等を怕れるのではないが、妻の命乞ひによつて、汝等の師父を饒してやるから、後門へ廻つて連れて行け！』

と大聲に叫んで洞の中へ引込んでしまつた。八戒、沙和尚は急いで馬を牽いて後門の方へ廻つて見ると、三藏は兩人を見て藪の中から跑出して來たので、直に馬へ上せて西へ走りました。

(二) 寶象國

一三藏師弟は波月洞を出て三日の後に、寶象國の都へ着き、三藏は直に朝廷へ行つて、文牒を出して國王の印を貰つた後、波月洞で公主百花羞から預かつて來た封書を差出すと、國王は讀んで大に驚き、聲を揚げて哭き悲しみましたが、やがて群臣に向つて、『誰か波月洞へ馳せ向ひ、此の妖怪を退治して、公主を救ひ出す者はないか』と尋ねたが、一人も應じる者がない。其の時一人の臣が進み出て、

『臣が見渡しました所で、諸臣は何れも凡人で、國家を守ることは出來ましても妖魔と通力を爭ふことは不得手と存じます。幸ひこれなる聖僧には、東土から遙々西天へ上つて、經を取らうといふからには、必ず妖魔を降す術も心得て居られるでありませう、此の長老に願つて、公主を救つていたゞいたら如何なものかと存じます。』と申上げる。

國王は三藏に向つて此の事を尋ねると、三藏は答へた。

『貧僧は只佛を念じるばかりで、妖魔を降すことは知りません。』

『妖魔を降す術がないと言はれるが、それで何うして西天まで往かれよう。』

『貧僧に二個の徒弟がありまして、此處まで參りますにも、皆此の二個の保護によつて、危難を免れて參つたのです。』

國王は之を聞くと、大に喜んで、直に二個の徒弟を朝廷に召した。

『二位の長老の中で、妖魔を降す術を心得て居られるのは那方か？』

『老猪が魔を降す術を知つて居ます。』と八戒が答へる。

而して國王の請ふがまゝに、八九丈の長身に變じて、群臣を驚かした後、沙和尚と共に雲に騰つて波月洞へ向ひました。

兩人はやがて雲を下りて洞口に進み、八戒が先づ釘鈀を擧げて石門を打破ると、かの妖精は、一口の鋼刀を揮つて、洞門の外に跑出で、兩人を見て大に怒り、

『和尚、汝等の師父を饒してやつた恩も忘れて、又引返して門を破るとは何事だ！』と叫ぶ。

『汝が寶象國の公主を盜んで妻となすと聞き、國王の旨意を受けて、擒へに來たのだ。』と八戒が言返す。

之を聞くと、妖精は益々怒つて、刀を揮つて砍り掛るので、八戒は鈀を使ひ、沙和尚は寶杖を擧げて戰つたが、八九合するうちに、八戒はもう疲れて、沙僧を顧

み、

『急に便が催して堪らなくなつたから、一寸行つて來るぞ。』

と言つて其の場を外し、藤蘿の中へ鑽込んで睡つてしまふ。其の後で沙僧はひとり敵と交戰つて居たが、終に虜にされて洞の中へ連れ込まれてしまひました。

妖精は洞へ歸ると、沙和尚を柱へ綱つて置いて、奥へ入つて行つたが、心の中に

『あの唐僧は上邦の人であるから、勿論禮義を知らぬ筈はない。それに生命を饒かつた恩義を忘れ、故もなく徒弟を遣して、妻を奪ひ返させるといふのは、これは必ず妻に賴まれて書信でも持つて行つたに相違ない。』と思ふと兇惡な性分が忽ち現はれて、片手に鋼刀を提げたまゝ、面色を變へて妻の居室へ跳込んで行く。其の時公主は化粧を畢つて、室を出ようとした所へ、夫の妖精が怖ろしい面相をして跑込んで來て、唐突に、

『此の畜生、俺がこれほどに寵愛するのに、父母の事ばかり想つて、毫も夫婦の情の無いのは何ういふものだ！』と怒號つた。

公主は吃驚して、

『郎君はまア何でそんな水臭い事を仰有るのです？』

『水臭いといふのは汝の事だ！』と妖精は罵る。『俺があの唐僧を捉へて來て吃はうとするのを、汝が夢に託けて命乞ひをしたのは、彼奴に書信を持たせてやるために仕組んだ狂言に相違ない。それでなくて、何で兩人の和尚を遣して、汝を奪返させる譯があらう！　みんな汝の企んだ事に違ひない。』

『否、それはみんな郎君の邪推といふものです。』と公主は辯解をする。『私は決して書信なぞを賴んだ覺えはありません。』

『よし、何處までも知らないと言ふなら、確かな證據を見せてやらう。』

と妖精はいきなり公主の頭髪を掴んで沙和尚の前へ曳いて行き、地へ押着けて、鋼刀を差着けながら、沙和尚に向つて言つた。

『汝等兩個が此處へ引返して來たのは、此の女が書信を送つたために、國王が汝等を遣したのに相違あるまい！。』

沙和尚は綱られながら、妖精が公主を殺さうとする樣子を見て、聲を勵まして、

『妖精、無禮をするな！』と喝りつけた。『我們が此處へ來たのは、決して書信な

ぞの行つたためではない、それは斯ういふ譯なのだ、我師父が寶象國へ着いて、國王に謁見を賜はると、國王から樣々の御下問があつた後、公主の畫像を出して來て、「若しや途中で、斯ういふ姿の女を見掛けなかつたか？」と尋ねられた。師父は其畫像を見ると、此の洞に捉へられて居る間に見た公主の樣子を思出して、見た通りをお答へしたので、國王は我們に命じて汝を拿へて、公主を宮中へ迎へ取らうとしたのだ。公主は少しも知らないことだ。殺したくば俺を殺せ、罪もない公主に害を加へてはならんぞ。』

之を聞いて妖精は始めて疑雲を晴らし、急に刀を投出して、兩方の手で公主を抱き起し、

『一時の錯誤から飛んだ亂暴なことをした、嘸驚いたらう！』

と言ひ〳〵塵を拂つて、公主を奥へ連れて行きました。

妖精は直に酒宴を開いて、樣々に公主の機嫌を取つて居たが、酒宴半ばになつて何か急に思着いたやうに、公主に向つて言つた。

『お前は暫くの間、家に居て、兩個の孩兒に氣を付けて、あの和尚を逃がさないやうにして居て貰ひたい。あの唐僧はお前の國に居るのだから、俺も行つて丈人に會つて來る。』

斯ういつて、もゝ立ち掛かるのを、公主は引留めて、言つた。

『父王は一歩も城を出たことのない人ですから、今郎君が其の相貌で行つたら、驚いてしまふでせう。それよりも却つて行らつしやらない方が安全でせう。』

『それなら、姿を變へて行かう。』

と言ひながら、身を搖がすと見る間し、妖精は忽ち變じて一個の貴公子になつた。

『おう、それならば大丈夫です。』と公主は喜んで見上げて居たが、『郎君が父王に會ひになれば、父王は屹度引留めて酒宴を催すでせうが、御酒を召上がつても、本相を露はさないやうに氣を付けて下さい。』

『よし、曉つた〳〵』

と言ふかと思ふと、妖精はもう雲へ騰つて行つてしまひました。

(三) 白馬

寶象國の宮中では、國王が唐僧を御前近く招いて、四方山の話に時を過ごしながら、八戒、沙和尚の消息を待つて居ると、忽ち黄門官が御前へ進んで、奏上げる。

『只今門外へ一個の貴公子が參つて、國王第三の駙馬だが、陛下に謁見して申上げたい事があつて來た、と申します、如何取計らひませうか？』

國王は少時首を傾げて考へて居たが、やがて左右を顧みて、

『寡人の駙馬といへば二個しかない筈だが、第三の駙馬とは何者だらう？』と尋ねられる。

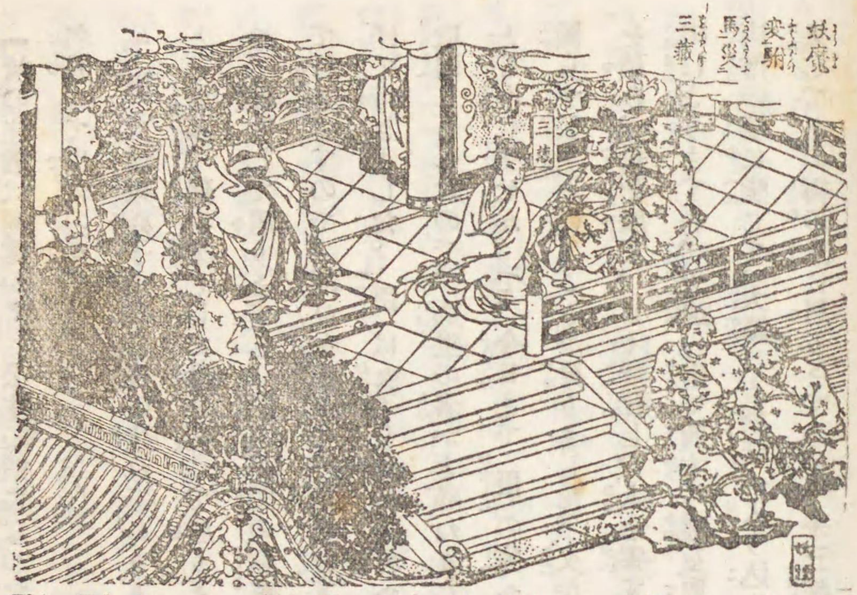
『第三の駙馬と名乘りまするからは、必定第三の公主を攫つて參つた、かの波月洞の妖怪に相違ございません。』

と群臣が奏上げるのを聞いて、國王は見る〳〵顔色を變へた。

『召入れることは成らぬ！』

其時三藏は膝を進めて、奏上した。

『妖怪は雲に騰つて往來することを心得て居りますれば、陛下のお許しがあらうが、



なからうが、參らうと思へば自由に入つて參ります、それよりは却つてお召入れになつた方が無事かと存じます。』

國王は唐僧の言葉を道理と聞いて、

『召入れよ！』と命じる。

滿廷の君臣は息を凝らして、如何な妖物が入つて來るかと待つて居たが、やがて黄門官に導かれて、金階の下に進んで、陛下を拜するのを見ると、人品といひ、擧止といひ、天晴な貴公子なので、一同あつと感嘆して、『これは妖精どころではない、立派な棟梁の才だ。』と思ひながら見て居ると、國王はやがて駙馬に向つて尋ねる。

『汝の住居は何處か？　公主の婿になつたのは何時か？　又何で今日になつて俄に名乘つて出たのか？』

『臣は城東碗子山破月庄の生れでありますが、幼い頃から馬に乘り、弓を彎くことを好み、獵を業として世を送つて居りますが、丁度今から十三年前、或日山へ入つて獵をして居りますと、忽ち一頭の猛虎が、一個の女子を駄つて、山の中段を走つて行きますので、覘ひを定めて一箭を放すと、虎は女子を棄て、箭を負ひながら逃げて行きました。臣は女子を負つて村へ歸り、樣々に介抱してやう〳〵に生命を取回しましたので、那里の者かと尋ねましても、只民家の女だとばかりで、何村の者とも申しません。で、今日まで臣の家へ留置いて、妻に致して居りましたが、今日圖らず公主といふことが分りました。又かの虎は臣の箭を逃れた後、山中で修業を積み、劫を歷て、よく變化し、人を害するのを常として居りましたが、近頃人の噂によりますと、大唐の僧で西方へ經を取りに往く者が、此の虎に害せられ、虎は唐僧の姿に變じて、大膽にも朝廷へ入り込んだといふことを聞きましたが、今見ると果してあの褥の上に居りますのが、十三年前に公主を奪つた虎で、眞の唐僧ではあ

りません。』

國王は之を聞いて不審に思ひ、

『それが何うして汝に分るのか？』と問ふ。

『臣は山中に住んで、虎を相手に日を送つて居る者です、如何に變化したからとて、臣の眼を騙ますことは出來ません。』と妖精が言つた。『若し御疑念がありますなら、臣が今本相を現はしてお目にかけませう。』

斯う言つて妖精は盞の水を口に含んで唐僧の前に進み、黑眼定身の法を使つて、口中の水を噴き掛けると、唐僧の姿は忽ち變じて一匹の猛虎になりました。

國王を初め群臣百官は、此有樣を見て、膽を潰し、一度に起つて奧へ逃込み、武將に命じて、多數の兵を以て虎を取圍ませ、手に手に武器を揮つて、四方八方から滅多斫りに斫りつけたので、尋常の者ならば、助かる筈はないのですが、三藏には如來の命令で、影身に添つて守護する神々があるので、刀の中に在つても創もつきません。衆人は呆氣に取られて、只わあ〳〵騷いて居るばかりでしたが、日沒頃になつて、やう〳〵虎を捉住り、鐵鎖に繫いで、鐵籠の中へ入れてしまひました。

國王はやつと安心して、群臣百官に朝廷を退らせ、駙馬を銀安殿に請じて酒宴を開き、音樂舞踊に長じた十八個の官女を選んで、酒の興を助けさせました。妖精は上座に坐つて、飽までも飲み喫つて、夜の更けるのも知らずに居たが、次第に醉ひが廻つて來ると、覺えず本相を現はして、いきなり側に琵琶を彈いて居た官女を把へて、一口に咬み殺し、舌皷を打つて吃ひ初めたので、其の餘の官女は膽を潰して逃げ出しましたが、餘りの怖ろしさに聲を擧げることもならず、簷の下や、短墻の蔭に匿れて戰々と慄へて居た。

此の時三藏の馬は驛館に繫がれて居たが、人々が「唐僧は虎の精であつた」と言ひ囃すのを聞いて、大に驚き、「之は必定妖精が師父に害を加へるために、虎の姿にしたものに相違ない、力と賴む孫行者が師の側に居ない上に、八戒、沙僧の兩人も、出て行つたぎり、今に音信がない、自分が行つて師父を救ふより外に手段はない」と思つたので、直に韁を斷つて小龍の姿を現はし、雲に駕つて半空から城内の樣子を看ると、銀安殿に燭の光が煌々と輝いて居る。雲から下りて中を窺ふと、妖精が只一人上座に坐つて、血の滴る官女の肉を裂いて吃ひながら、酒を呷つて居るので、小

龍は直に一つの計略を考へ、身を官女の姿に變じて、徐に殿内に進み入り、妖魔の側へ寄つて、

『駙馬公、何卒生命だけはお赦し下さい。私がお側に居てお酌を致します』と言ひながら、酒壺を取つて酌をする。

妖精は默つて飲んで居たが、やがて小龍に向つて言つた。

『一差舞つて見よ。』

『舞つても宜しうございますが、』と小龍は笑ひながら答へる。『素手では興がありません。』

之を聞くと妖精は腰の劍を解き、鞘を拂つて小龍に渡した。

小龍は劍を取つて舞ひながら、隙を窺ひ飛込んで、妖精を目掛けて一刀に劈下すと、妖精は急に身を躱しながら、側にあつた鐵の大燭臺を取つて受止める。此時小龍は本相を現して殿外に出ると、妖精も追つて出て、雲の上で稍暫く戰つたが、小龍はだん〳〵受太刀になつて、氣を焦り、妖精を目掛けて劍を投付けた。妖精は片手で劍を承けながら、片手で燭臺を抛り付けた。小龍は身を躱す暇もなく、したゝ

かに後腿を打たれたので、急に雲を下つて御水河の底へ身を潜める。妖精も直に追ひ下つたが、遂に小龍の姿を見失つて、また銀安殿へ回りました。

小龍は半時ばかりも水底に潜んで、外の様子を窺つて居たが、やがて水を出て館驛へ回り、元の白馬になつて厩に眠つて居ると、少時して八戒が外から入つて來ました。八戒は沙僧を欺して草の中へ潜り込んだ後、何も知らずに眠つてしまつたが、目が覺めるともう夜半時分なので、驚いてると、師父の姿が見えないので厩まで様子を見に來たのでした。見ると白馬は厩に眠つてゐるが、不審な事には、全身が汗に濡れて居るばかりか、腿に痕がついてゐるので、八戒は思はず口の中で、

『これは大變だ、師父は惡漢に何うかされたに違ひない、でなくて馬までがこんなに怪我をしてゐる筈はない。』

と呟くのを聞いて、馬は忽ち聲を立てゝ、

『師兄！』と呼ぶ。

八戒は之を聞くと吃驚して尻餅をつき、慌てゝ爬起きて逃げようとするのを、白馬は皂衣の裙を啣へて曳住めながら、

『哥々、何も驚くことはない、まア私の話す事をお聞きなさい。』と言つて、今夜の一伍一什を話します。

八戒は熟々と白馬の話を聞いて、

『俺の力では到底彼怪に勝てる見込はない。』と言つて嘆息を吐いた。『此處に居て生捕られるよりも、早く逐電した方がよさゝうだ。』

小龍は涙を流して、

『師兄、そんな心細いことを言はないで下さい』と言つたが、『師父を救はうと思ふなら、直に花果山へ行つて、孫行者を呼んでお出でなさい。』

『駄目、駄目！　あの猴子俺を怨んで居るから、俺が行つたのでは諾と言つて來る筈がない。』と八戒は頭を振る。『惡くするとあの棒で打殺される！』

『大丈夫です。大師兄はそんな事をする人ではありません。』と小龍は八戒を勵ますやうに言ふ。『ただ大師兄に會つても、師父が難に遭つたとは言はずに、師父が後悔して貴兄の事ばかり言つて居るから、と言つて哄して連れておいでなさい。此處へ來て此の有樣を見さへすれば、師父を救はずに居られないでせう。』

白馬の熱心な言葉に勵まされて、八戒も終に心を飜した。

『分つた、分つた！　お前の志に對しても斯うしては居られない！』

と言ひ棄てゝ八戒は雲へ駕つて東方指して飛んで行きました。

(四) 花果山

齊天大聖孫悟空は、白虎嶺で師三藏の怒を招き、貶書を與へられて、餘儀なく花果山へ回りましたが、雲から下りて山の光景を見ると、山中到る所荒れ果てゝ、巖は倒れ、峰は崩れ、草にも木にも昔の姿はありません。大聖は心の中に二郎眞君と戰つた當時の事を思ひ浮べて、暗涙に咽びながら、茫然と彳んで居ると、忽ち岩の陰から七八匹の小猿が跳出して、

『大聖にはようこそお歸りになりました。』

と口々に叫びながら、跪いて禮拜する。

『俺が歸つたのにお前們の姿が見えないのは、何うした譯か？』と大聖が尋ねる。

『大聖がお在にならなくなりましてから、私共は獵人に苦しめられて、一日も安

穩に送つた日はありません。』と小猿們は涙を流して答へる。『ですから今日では一同思ひ〳〵に逃げ隱れて、誰一個出て來るものはないのです。』

『獵人はお前們を捕つて、何にするのか？』

『死んだものは肉を食ひ、生捕つたものは跳圈を敎へて慰みにします。』

之を聞くと大聖は大に怒つて、

『其獵人は何時頃來るのか？』

『毎日のやうに參りますのですが、』と小猿們が答へる。『今日はまだ參りません。』

『それでは直に行つて全山の猿を呼び集めて來い！』と大聖が命じる。

間もなく全山の猿が身邊へ集まつて來て、嬉しさうに禮拜するのを見て、大聖は一同の猿に命じて、山の上へ碎石を積み上げさせて、獵人の來るのを待つて居ました。其時南の方から、幾百の人馬が、太鼓を打ち、鑼を鳴らし、手に手に刀や鎗を閃かして、山へ上つて來たが、悟空は山上から之を見て、印を結び、呪文を唱へて巽の方に向つて氣息を吹くと、忽ち一陣の狂風が吹起つて、かの碎石を獵人の頭の上へ吹散らしたので、獵人は鎗や刀を投棄て、澤山の死傷を後に殘して、蜘蛛の子を散らすやうに逃げて行つた。悟空は掌を皷つて喜び、直に小猴に命じて、獵人の棄てて行つた武器を拾はせ、又其置いて行つた旗を集めて、一面の幟を作り、之に『重修花果山、復整水簾洞、齊天大聖』といふ十四字を書き付けて、洞門に竪て、小猴們を指揮して滿山に種々の草木を植付けて、花果山の風致を添へました。

一日大聖は例の通り石崖の上へ座を占めると、幾千の眷族は、四方から集まつて來て、猴王の前へ竝列する。其時遙かの末座に、小猴の中に混つて、只一個の異類の者が、顏を地へ着けて蹲まつて居るのを、大聖は眼敏く見付けて、小猴に命じて自分の前へ連れて來させる。異類の者は、小猴に引立てられて、懼る〳〵猴王の面

前へ進んだが、まだ顏を擧げないで、跪拜をして居るので、「不審な奴だ、眷族の中には、斯樣な者はない筈だが」と猴王は怪しみながら、凝乎と見て、

『これ汝は何者だ！顏を擡げい！』

異類の者は急に顏をあげて、長い嘴を猴王の方へ突出した。

『これなら分るでせう！』

悟空は思はず失笑して、

『猪八戒ぢやないか？』といふ。『貴樣何しに來た？』

『師兄を迎へに來ました。』と八戒が答へる。『師父は師兄の事ばかり想つて居て私に迎ひに行つて來いといふのです。』

『虚言を吐け！』と悟空は一喝した。『貶書まで書いて渡した者が、俺の事を想ふ筈がない。』

『師兄、虚言ぢやアない、本當に然うなんです。』と八戒が言ふ。『ですから、萬望一緒に往つて下さい。』

『此の獣子め、貴様は俺を瞞すつもりか！』と悟空は聲を荒くして怒號つた。『俺の左の耳には三十三天の説話も聞え、右の耳には十大閻王が判官と算帳をするのも聞き取れるのだ。さア眞實の事を言つて見ろ、師父は何處で難儀をして居られるのだ？』

『否、難儀に遭つたのではありません。』と八戒は尙ほも辯解しようとする。『實際師父が師兄の事を想つて居るのです。』

行者は之を聞くと愈〻怒つて、

『此の畜生、まだ俺を瞞すつもりで居る！よし〳〵眞實を言はないなら、斯うして呉れる。』と言つたが、小猴們に向つて、『あの和尙を引倒して、棍棒を吃はせよ』と命じる。

『まア〳〵待つて下さい！』と八戒は泣聲を出して言ふ。『眞實の事を言ひますから、何卒打つだけは赦して下さい！』

終に黄袍怪の一條を細かに話したので、行者は熟々と聞いて、

『それ見ろ！だから俺が別れる時に何と言つた。「若し途中で妖魔に遭つたら、俺の名を言へ！」とよく〳〵貴様們に言つて置いたではないか。何故俺の名を言はないのだ？』

八戒は胸の中で「此の猴子を引張つて行くには激らせるに限る。」と思つた。

『哥々、實はそれも試つて見たのです。「五百年前大に天宮を鬧がした齊天大聖孫悟空といふ神通廣大な大師兄があるのを知らないか」と言ふと、その妖精は却つて哥哥を罵つて、「孫悟空が何うした？若し來たらあの瘦猴の皮を剝ぎ、筋骨を拔いて、油で蒸して吃つてやらう」なぞと吐かすのです。』

行者は果して火のやうに憤激つた。

『俺を罵るとは無禮な奴だ！』と言つたが、『よしそれならば直に行つて、其奴を捉へて思ひ知らせて呉れよう。』

言ふや否や、身に直綴を纏ひ、虎の皮の裙を引締め、小猴們に別れを告げると、如意棒を執つて、八戒と共に雲に駕つて、花果山を出立しました。

兩人は程なく東洋海を過ぎて、波月洞の上へ來ると、八戒は塔を指さして、これが黃袍怪の住家だと告げるので、行者は直に雲を下りて、洞門の前まで行つて見ると、二個の小兒が遊んで居る。行者はいきなり跑寄つて、二兒の頭を掴んで走り出すと、洞の中から、小兒の哭聲を聞いて、公主が門外へ駈出して來た。

『これ〳〵、其の小兒を何處へ連れて行くのだ。』と呼び留める。『其の兒の父は尋常の者ではないから、若し差錯があつたら、身の爲になるまいぞ！』

行者は回顧つて言つた。

『私は唐僧の大徒弟の孫悟空といふ者だが、師弟の沙和尚といふのが、洞裡に居る筈だ、若し其者を爰へ出すならば、此の小兒を還してやる。』

公主は之を聞くと、大急ぎで洞の中へ駈込んで、沙和尚の繩を解いたので、沙僧は忙いで門外へ跑出して、行者と八戒に會つて、昨日からの事を話しました。

行者は兩人に向つて、

『汝們二人は此小兒を抱いて、寶象國へ往き、金鑾殿の上から玉階の前へ投落し、大聲を擧げて黃袍怪の兒を捉へて來たと告げるがよい、妖精は然う聞くと驚いて先づ此處へ回つて來るに相違ないから、俺は此處に居て打取つて呉れる。』と言ひつゝ、小兒を渡して先へ行かせ、やがて身を飜して塔門の下へ來ると、公主は此樣子を見て、涙を流して行者の違約を責めるのを、行者は輕く受流して、

『公主、御心配なさいますな、令郎は外公に會はせるために先へお送り申したのです、程なく妖精を退治して、公主も必ず父君のお側へお連れ申します。』

『汝は何うしてあの妖精を捉へるつもりか？』と公主は心配さうに尋ねる。

『老孫は妖魔を降す術を心得て居ります。』と行者が答へる。『公主には暫時の間何處ぞへ廻避れて、老孫が妖精を退治るまで待つて居て下さい。』

公主は言はれるまゝに身を隱すと、行者は身を一搖りして、忽ち公主の姿に變じ、洞の奥で、妖精の立回るのを待受けて居ました。

(五) 黃袍怪

寶象國の宮中では、夜が明けて始めて昨夜の始末を知り、第三の駙馬は矢張怖ろしい妖精であつたことが曉つたので、國王は群臣百官を集めて密々に評議を開いて居ると、忽ち玉階の前へ兩個の小兒の屍骸が落ちて來ました。群臣が顏色を變へて驚き騷ぐ所へ、天上から聲が聞こえて、

『今落したのは黃袍怪の小兒らだ。八戒と沙和尙の手に捉へられて、此處へ運ばれたのだ。』といふ。

此時妖精は昨夜の酒がまだ醒めずに、銀安殿でうつら〳〵と睡つて居たが、此聲が夢のやうに耳へ入つたので、驚いて目を覺まして天空を見ると、兩個の和尙が雲の上で喚き立てゝ居る。妖精は心の中に、「あの沙和尙は洞裡へ確かに縛つて置いた筈だが、何うして脫出して來たのか？又小兒らは何うして彼奴們の手に入つたのか？これは何か變事が起つたに相違ない！」と思つたが、「何にしても一旦立回つて濠子を見て來なければなるまい」と國王に會ふ暇もなく、雲に駕つて波月洞へ回りました。

さて黃袍怪は洞へ回つて見ると、公主は慌たゞしく出迎へて胸を抑へて哭倒れる

妖精は急いで抱起しながら、不在中の樣子を尋ねると、公主ははら〳〵と涙を流して、

『郎君は父にお會ひになつたら、何故直に回つていらつしやらないのです。』と怨みを言ふ。『今朝方八戒といふ和尙が來て、あの沙和尙を奪つて行つたばかりか、兩個の孩兒までも連れて行つてしまひました。それとも知らずに今まで何をしてゐらしつたのです。』

之を聞くと、妖精は地蹈鞴を踏んで悔しがつた。

『罷了、罷了、それでは眞實に孩兒らを搶られたのか。』と言つたが、『今引捉へて我兒の讐を取つてやるから、お前ももう泣くな。』

と言ひながら妻の背中を撫でようとすると、行者は忽ち本相を現はして、妖精の前へ立闊かつた。

『俺を誰だと思ふ？唐僧の大徒弟孫悟空を知らないか！』と一喝する。『汝我師父を害せんとするばかりか、背後で俺を罵つたことも、八戒から聞いて殘らず知つて居るぞ！さア、首を伸ばして此の一棒を受けろ！』

と如意棒を執つて立向ふと、妖精は笑つて、

『俺はまだ汝を罵つた覺えはないが、さア、打てるなら打つて見ろ。』と言ひつゝ、小妖に命じて塔の門を殘らず閉鎖らせた。『最早逃げようとて逃がさないぞ！』

妖精は小妖を指揮して、行者を取籠めて、四方から打ちかゝる。行者は忽ち姿を三頭六臂に變じ、三根の棒を使つて、四方八方に暴れ廻り、見る間に洞中の小妖を一個殘らず打殺し、黃袍怪の逃げるのを赶つて門を出で、雲を踏んで戰ふこと五六十合に及んだが、最後に妖精は、行者の打込む一棒を受け損じたと見る間に、忽ち姿を消してしまつた。行者は直に雲を飛ばして中空に騰り、瞳を凝らして四方を眺めたけれども、一向に所在が知れないので、獨り心に合點いて、『うむ、これは地上の怪物ではないわい、恐らく天上から降つたものであらう。』と思ひながら、一飛に南天門に上り、通明殿の下まで行つて、四大天師に始終を話して、天上界の神々を尋べて貰ふ。四大天師は直に靈霄殿に進み、玉帝の勅許を受けて、天上の神々を査べて見ると、二十八宿中第二十八位の奎星が缺けて居るので、玉帝の御前へ回つて奏上げる。

『奎木狼が下界へ走りました。』

『走つてから幾日になるか？』

『今日で十三日になります。』

玉帝は獨りで點頭いて、

『天上の十三日は下界の十三年に當る。』と言つて考へて居たが、やがて天師に向つて言つた。『本部の星員に命じて上界に收めさせよ。』

程なく二十七位の星員は、玉帝の勅命を奉じて下界に下り、奎星の所在を尋ねると、かの妖精は、行者の一棒を吃つた時、澗の裡に隱れ、水氣に包まれて姿を瞞まして居たが、忽ち空中に星員らの聲が聞えたので、我知らず水の中から頭を出した。其の姿を衆星のために發見され、玉帝の前へ連れて行かれました。

玉帝は奎星を見て、下界へ逃げ下つた理由を尋ねる。其時奎星は頭を地へつけて罪を謝しながら陳述する所によると、かの寶象國の公主は原は披香殿の宮女でしたが、奎星と情を通じて、互に深く愛し合つた結果、下界へ降つて同棲しようといふ約束を結び、女は先づ天界を棄てゝ寶象國の公主に托生りましたので、奎星も約束を違へ

ず下界へ下り、妖魔となつて、十三年の間、波月洞に立籠り、公主と夫婦になつて暮して居たのを、圖らず孫行者のために見露はされて、此の始末になりましたといふのです。其處で玉帝は奎星の罪科を定め、兜率宮に貶して、太上老君の丹爐の火焚とし、若し功があつた節には復職させようといふ判決を下されたので、行者は直に玉帝の御前に進んで、お禮を述べ、諸神に別を告げて波月洞へ回りました。

行者は波月洞へ回ると、先づ公主を尋ね出して、始終の模樣を話した後、公主を連れて寶象國へ行きました。公主は金鸞殿に上つて、父母を拜し、泣いて從來の事情を訴へる間に、百官は公主の回つたことを聞き傳へて、一同朝に出て賀詞を獻じました。國王はやがて行者に向つて、黃袍怪の素性を尋ねるので、行者は天上界で見聞した一伍一什を物語つて、奎星の降來であつたことを奏上げると、國王も且つは驚き、且つは喜んで、左右の臣に命じて、行者を三藏の前に案内をさせました。行者は師三藏が虎の姿になつて、鐵籠の中に入れられて居るのを見て、笑ひながら言つた。

『師父、貴下は實に善人です。八戒の讒言を信じて、弟子を極惡人のやうに罵つて、逐拂つた程の善人が、何うして斯のやうな始末になつたのです？』

沙和尚は行者の前へ跪いて、

『師兄、古人も「僧面を看るな、佛面を看ろ」と言つたではありませんか。斯うして回つて來られた上は、何も言はずに、萬望師父を助けて上げて下さい。』と賴む。

行者は手を執つて沙和尚を引立てながら、

『言はれるまでもない！何うしてこれが見て居られるものか。さア、疾く水を持つて來て！』と言つて、左右の者の差出す水を取るや否や、口へ含んで、虎の頭へ噴掛けると、忽ち妖術が破れて、三藏はまた原の姿に復りました。

此の時三藏は徐かに眼を開いたが、行者の姿を認めるや否や、忙いで手を執つた。

『悟空ではないか？何うして回つて來た？』

沙僧が引取つて、三藏が難に遇つてから後の事を細かに話すと、三藏は深く行者の功勞を感謝して、

『若し西方を去つて東土に回る日があつたら、唐王に奏して汝の功勞を第一に數へよう』と言つた。

國王は厚く四人の師弟を饗應し、禮物を積んで、公主の再生の恩に酬ひようとし

ましたが、師弟は固く辭して、一物をも受けず、王に別れを告げて、寶象國を出立しました。

(六) 平頂山

三藏師弟は、寶象國を出て、西へ西へと進むうちに、冬が過ぎて、又春の景色に遇ひました。一日一座の高山に差しかゝつて、險阻な山路を登つて行くと、前方の草の上に一個の樵夫が居て、三藏を呼びかけます。

『長老、一寸お待ちなさい、一言申上げることがあります。』と大聲をあげて言つた。

『此の山には一群の妖魔が住んで居て、往來の人を待つて居りますから油斷をしてはいけません。』

三藏は顏色を變へて行者の方を見た。

『悟空、あの樵夫の話を聽いたか?』と言つたが、『汝彼處へ往つてもつと委しく樣子を聞いて來い!』

悟空は樵夫の側へ進んで頭を下げながら、

『只今のお話の妖魔といふのは、全體何んな妖魔ですか、もう少し委しいことを承り度い』と尋ねる。

樵夫は慌てゝ答禮をして言ふには、

『此の山は平頂山といひ、上下六百里あります。山中に一つの洞があつて、名を蓮華洞と喚び、これが妖魔の住居です。此の洞には兄弟兩個の魔王があつて、兄を金角弟を銀角といひ、近頃大唐國から西天へ經を取りに往く僧侶の繪姿を作つて、此處へ來たら吃はうと待構へて居ります。汝們は別處から來なすつたなら宜しいが、若し唐から來たのでしたら、餘程御用心なさらなくてはなりません。』

『如何にも我們は唐朝から參つた者です』と行者が答へる。

『それでは妖魔は汝們を待つて居るのでせう。かの二個の大王は廣大な神通力を具へた上に、五件の寶貝を持つて居りますから、無事に此處を越えようといふには、大分お骨が折れませう。』

といふかと思ふと、樵夫の姿は煙のやうに消えて了ひました。行者は空を見上げて、平生三藏を守護する神々の一個が樵夫の姿になつて警告したのだと覺つたが、『それにしても此の事を有のまゝに告げたら、師父は必ず吃驚して度を失ふだらうし、又言はずに居たら、油斷して妖魔に攫はれるだらう』と思ひながら引回して來たが、『これは迂濶り師父の側を離れる譯には行かない、兎も角も八戒をやつて、妖魔の樣子を搜らせることにしよう、それで若し八戒が捕虜にでもなつたら、其の時こそ救助に行つて俺の本事を見せてやらう』と心を定めて、師父の前へ回つて來ました。

『師父、御心配には及びません。』と行者は何氣なく言つた。『此の邊の人は氣が小さいものですから、あゝ大袈裟に言ふのですが、それ程の妖魔でもなささうです。併し御安心のため八戒をやつて山の樣子を搜らせたら宜しいでせう。』

三藏は行者の言を用ゐて、八戒に山の樣子を見巡つて來いと命けたので、八戒は心の裡では行者を恨みながらも、澁々釘鈀を執つて出て行きました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

さて平頂山の奥にある蓮華洞では、今しも金角銀角の二大王が、唐僧の噂をして居ましたが、金角大王はやがて一幅の卷物を出して銀角に渡して、

『爰に唐僧の一行四人の畫姿があるから、之を持つて山を巡り、若し姿の似寄つた和尚に遇着つたら、直に捉へて來るがよい。』と命じる。『あの唐僧は金蟬長老の臨凡、十世修行の聖僧で、其の肉を吃へば延壽長生の效があるといふから、一刻も早く手に入れたいものだ。』

銀角は金角の命を受けると、直に三十名の小妖を引率れて、山上を巡邏するうちに、ぱつたりと八戒に遇着ひました。先鋒の小妖が八戒を咎めて居る間に、一個の小妖が銀角に向つて呼いた。

『此の和尚は圖の中にある猪八戒といふのによく似て居ります。』

銀角は小妖に命じて圖を披かせ、鎗に掛けて眺めながら、
『此の白馬に騎つたのが唐僧、此の毛瞼が孫行者、此の黑くて長いのが沙和尚、此の嘴の長い、耳の大きいのが猪八戒。』
と一々に見比べて行くと、獃子はいきなり逃げ掛かるのを、
『あれこそ猪八戒に相違ない。』と銀角は刀を揮上げて斬りかける。八戒も釘鈀を擧げて交戰ひ、二十合ばかりも鬪つたが、小妖們が一齊に打つてかゝるので、急に怯氣がついて逃出す拍子に、藤蘿に足を取られて地上へどうと倒れました。小妖們は忽ち八戒の上へ乘りかゝつて、毛を抓み耳朶を引張り、生擒にして蓮華洞へ引上げました。銀角は洞へ回つて、八戒を金角の前へ引据ゑた。
『此の和尚は役に立たん。』と金角は弟を看て言つた。『まア裏の池へでも浸して置いて兩日ばかりしたら鹽漬にして下酒にしよう。』
斯う言つて小妖們に八戒を裏へ曳かせてやると、金角は更に銀角に向つて言つた。
『兄弟、八戒が手に入る位だから、唐僧も近くに居るに相違ない。もう一度山を見巡つて、必ず搦め捕つて來なさい。だが大徒弟孫行者といふのは神通廣大な者だか

ら、迂濶り手向ひをしてはならん、只計略を用ゐて擒にするがよい。』
銀角は直に小妖を率れて山へ登り、絕頂に立つて四方へ目を配つて居ました。
此の間三藏は山の下で八戒の回るのを待つて居たが、いつまで經つても八戒の消息がないので、氣を揉んで、行者に尋ねる。
『悟能は何うしたのか？出て行つてから、もう大分久しくなるが、何で歸らないのか？』
行者も心の中では不審に思つて居たが、何氣ない風をして、
『師父、馬へお乘り下さい、一同で行つて彼奴を尋ねて見ませう。』
と三藏を守護して山へ入つて行きました。
此の時銀角は山上から三藏師弟の姿を認めて、急に小妖に命じて洞へ回らせ、身を道士の姿に變じて山を下り、怪我をしたやうな風を粧ひ、路傍へ倒れて、助けを呼んで居ました。
三藏は不圖此の聲を聽いて、聲のする方へ馬を寄せると、かの魔王は草の中から爬出して來て、三藏の馬前に跪いて頭を下げる。三藏は馬上から見ると、年老つ

た道士なので、忙いで馬から下りて、引起さうとすると、道士は、

『疼い、疼い、手を放して下さい！』と叫び立てる。

三藏は手を放して、様子を見ると、道士の脚から血が流れて其の邊の草を染めて居るので、驚いて理由を尋ねると、

『貧道は此山の西面にある清幽觀の道士ですが、昨日小徒を連れて山の南面にある施主の家へ參り、禳星をして夜に入つて歸りますと、猛虎が出て小徒を啣へて行きました。貧道は一生懸命に逃げて來るうちに石に跌いてこんな大怪我をしてやつと、此處まで爬つて來ましたが、もう動けなくなつて、草の中に倒れて居りましたのです。』

と妖魔が答へる。『此處で師父にお目にかゝつたのは天の助けでございませう、萬望私を觀までお連れ下さいまし、觀へ回りますれば出來るだけの御禮は致します。』

三藏は直に道士の言葉を信じて、

『先生、御安心なさい、我們は何れも出家の身でありますれば、困るものを救はずには居られません。』と言つたが、悟空を呼んで、

『此の方を馱つて行つてあげろ！』と命ける。

行者は此の道士を妖魔と見拔いては居たが、故意と背を出して馱ひながら、三藏沙僧の後へついて行く。三四里ばかり行くうちに、先立つた兩人が山の凹みへ下りて見えなくなつたので、行者は此の隙に妖魔を投殺して呉れようと思つてゐると、妖魔も直に曉つて、行者の背上に馱さりながら、印を結び、呪文を唱へて、忽ち須彌山を呼んで行者の頭上へ落ちかゝらせる。行者は直に頭を偏つて、左の肩で山を受留めながら、

『此の妖魔そんなことをして老孫を壓すつもりか！』と笑ふ。

妖魔は仕損じたと見るや否や、再び呪文を唱へて、峨眉山を呼んで行者の上へ落しかける。行者は又も頭を偏つて、今度は右の肩で受留め、兩座の山を左右の肩に擔ひながら、飛ぶが如くに師父の後を赶つて行く。妖魔は之を見て愈々驚き、急に眞言を念じて、泰山を呼んで、行者の上頭へ落ちかゝらせたので、流石の行者も三座の大山に壓されて、七竅から血を噴いて、其處へ壓潰されてしまひました。

銀角は行者を壓倒して置いて、直に三藏に赶着き、雲の端から手を伸ばして、沙僧と三藏とを兩手に摑み、一陣の風に駕つて蓮花洞へ回つて來た。

『哥々、和尚は殘らず手に入つた。』と大聲をあげる。

金角は奥から立出て來て、兩人を見ましたが、
『賢弟、まだ不可い。』と不足らしく言つた。『唐僧は手に入つたが、肝心の孫行者を捉へないうちは吃ふ譯に行かない。』
銀角は之を聞くと笑つて言つた。
『孫行者は三座の大山を呼んで壓着けて置きましたから、我們が行くまでもなく、兩個の小妖を遣つて、あの兩件の寶貝へ裝込んで來させませう。』
金角は有理と同意して、直に紫金紅葫蘆、羊脂玉淨瓶といふ二件の寶貝を出し、精細鬼、伶俐蟲といふ二個の小妖を呼んで、
『汝們は此の兩個の寶貝を持つて山の頂上へ上り、底を天に向け、口を地に向けて、「孫行者」と一聲呼ぶのぢや、若し「應」と答へれば、もう此の裡へ裝込まれて居るから、上から、「太上老君急々如律令奉勅」の帖兒を貼つて置けば、一時三刻のうちに骨も肉もどろ〳〵に溶けてしまふであらう。』
と言つて寶貝を渡しました。精細鬼、伶俐蟲が命を受けて洞を出ると、銀角は唐僧師弟を縛つて廊下の天井へ吊して、兩妖の回るのを待つて居ました。

(七) 天地を裝る葫蘆

孫行者は銀角大王の妖術に遭つて、三山の下へ壓着けられ、身動きも出來ないやうにされてしまつたので、俄に聲を擧げて三藏の名を呼びながら、
『師父、何うしませう、先年兩界山で師父に救はれて、佛門に歸依して以來、西天に往つて佛を拜し、正果を得ようとばかり心掛けて居りましたのに、今日此處へ來て魔障に逢ひ、大山の下に壓着けられるといふのは、何事でせう？』
と涙を流して訴へました。
空中で三藏を守護してゐる諸神が此の聲を聲きつけて、山神や土地神と共に急いで駈着けて來ました。五方揭諦は神々に向つて、
『此の山は誰の支配になつてゐるのか？』と尋ねる。
『我們が支配して居ります。』と土地神が答へる。
『お前達は此の山の下に壓れて居る者を知つてゐるか？』
『私共は一向に存じません。』

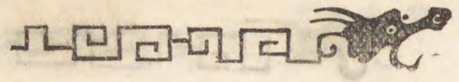
『知らないとあらば言つて聞かせるが、此の下に居るのは齊天大聖だ、今正果に歸して、唐僧の徒弟となつて、西天へ跟いて行かうとするのを、お前達は何と思つて山を妖魔に借したのだ！』

之を聞くと山神地神は大に恐縮して、急に呪文を唱へ、山を取つて本へ歸す。行者は跳起きて棒を掣出して土地山神を打たうとするので、諸神が忙てゝ押止める。行者は聲を荒くして、土地山神に向ひ、

『汝們は老孫を怕れずに、却つて妖怪の命に從ふとは何事だ！』と詰る。

土地山神は頭を叩いて罪を謝びながら、

『決して然ういふ譯ではないのですが、



あの魔王は神通廣大で、動眞言の呪文を唱へて私共を喚び出しますのです。』と言つて居ると、忽ち山の凹處から、一道の光を空に映しながら、此方へ向つて來るものがある。行者は土地山神に向つて、

『あの光を放す物は何か？』と尋ねる

『あれは妖魔が寶貝を持つて此方へ參るのです。』

『その妖魔は平生どんな種類の人間と往來して居るか？』

『魔王は丹を燒いたり、藥を煉ることが好きで、仙術を得た道士と交際して居ります。』

『それだけ聞けばもう宜しい！』と言つて、行者は土地山神其他の諸神を立去らせ、身を搖つて忽ち一個の老道士に變じて、待つて居る。程なく精細鬼、伶俐蟲の兩個は爰へ來て、行者を見て、

『道士には何處から來られた？』と尋ねる。

『蓬萊山から仙術を傳へに來た者だが、汝們は何處から來て、何處へ行かれる？』

兩妖は蓬萊山の仙人と聞いて、すつかり信じてしまひ、急に言葉を改めて、

『我們は此の山の奥の蓮花洞の者ですが、今大王の命令で、唐僧の徒弟の孫行者を押さへに行く所です。』と隱さずに答へる。

『それは好い處で逢つた。』と行者は故意と喜んだやうな風をして言ふ。『あの猴には私もちと遺恨があるから、それでは力を借して進ぜよう。』

『何う致しまして、師父にお骨折をかけるまでもなく、大王がもうちやんと三座の大山を呼んで壓着けて置いたのですから、我們は只此二個の寶貝を持つて行つて、裝り込んで來ればよいのです。』

『其の寶貝といふのは何ういふ物か？何んな風にして裝り込むのか？』

兩妖は自慢げに紅葫蘆、玉淨瓶の二件を見せて、人を裝る方法を說明して聞かせました。行者は心中に驚きながらも、何氣ない風をして言つた。

『どれ其の寶貝を私にお見せ！』

兩妖が安心して渡すのを行者は手に取つて熟々と眺めながら、心の中で、「これを持つて逃るのは譯はないが、人の物を搶奪つたと言はれては面白くない、一つ計略で取り上げてやらう」と思案を定め、寶貝を兩妖に返して、

『此の寶貝なら大して珍らしいものでもない！』と輕蔑したやうに言ふ。『私も寶貝を一個有つて居るよ。』

『師父の持つて居られるのは、どんな寶貝です？一寸拜見させて頂く譯には行きませんか？』

『うむ、見せてもよい！』と言ひながら行者は尾の上の毛を一根拔いて、長さ一尺七寸ばかりの紅葫蘆に變じ、腰の間から取出して渡すと、兩妖は熟々見て、

『これは結構な葫蘆ですが、何のやうな奇特があるのですか？』

『私の葫蘆には天が裝り込めるのぢや。』

『それは眞實のことですか？』

『眞實とも！虛僞だと思ふなら、裝つて見せようか？』

之を聞いて伶俐蟲は急に精細鬼の袖を引いて、密々と「寶貝を交換へたらどうか」といふ相談を始めるのを、行者は早くも見て取つて、心の中に「占た！」と思ひながら、伶俐蟲を呼んで、

『これ〳〵何をそんなに相談してゐるのだ？欲しいなら、換へてやらうか？』とい

ふ。

『眞實に天が裝れるなら、是非交換へていただき度いのです。』と兩妖が答へる。

『よし、それなら爰で天を裝つて見せよう。』

と言ひながら、行者は印を結び、呪文を唱へて、守護の神々を呼び、窃と今日の次第を話した上、

『お前達は老孫の代りに玉帝に奏上げて、半時ばかり天を借して、此葫蘆の中へ裝閉ませて貰ふやうに願つて來い』と吩咐ける。

諸神は直に靈霄殿へ上つて、玉帝に此の由を啓奏げると、玉帝は驚いて、

『猿め無法な事を言ふ！天が裝れるものではない！』と言つて、暫く考へて居たが、やがて哪叱太子に向つて『直に北天門へ往つて眞武君の皂旗を借り、南天門へ出て、旗を展げて日月星辰を閉して遣はせ！然うすれば天地は暫時闇になるから、天を裝つたと言つて妖魔を哄くことが出來るであらう』と命じる。

哪叱が勅命を受けて立つたのを見て、神々は地へ回つて、行者の耳へ此の様子を知らせました。

行者は之を聞くと、直に葫蘆を取つて天へ抛上げると、見るや否や、南天門では哪叱が皂旗を展げて、日月星辰を閉したので、天地は忽ち闇になつて、前に居る人の面も見えないやうになりました。

二妖は吃驚して、

『日中に斯う暗くなつたのは、何ういふ譯です？』と尋ねる。

『今天を裝つたので、日月星辰はすべて此の葫蘆の中へ入つてしまつたのだ。それで此の通り黑闇になつたのだ。』

二妖はこれを聞くと泣聲を出して、

『早く天を出して下さい！もう充分です。』といふ。

行者は又呪文を唱へると、哪叱が旗を捲いたので、日が再び現はれて、天地は元の通りの日中に復りました。

二妖は急に葫蘆と淨瓶を行者に渡して、行者の葫蘆と取換へて貰ひ、喜んで撫で廻して居る間に、行者は兩個の寶貝を持つて雲に跳駕り、空中に立つて二妖の樣子を窺つて居りました。

兩個の小妖は少時して道士の姿が見えないのに氣がつき、不審さうに遠近を見廻して居た。

『まあ、いゝわ！』と伶俐蟲が言ふ。『一つ此の葫蘆を試して見よう。』

言ひながら假葫蘆を取つて、行者のやつた通り、天に向つて抛り上げると、忽ち落ちて來て一向に天の裝れる樣子もない。

『これはしまつたぞ！』と伶俐蟲は顏色を變へて言つた。『殊によると、孫行者が神仙になつて來て、我佯の寶貝を取つて行つたのではないか？』

『まさかそんな事もあるまい！』と精細鬼は首を傾げて、『どれ俺に借して見な！何でも抛る時に呪文を唱へて居たやうだつた。』と言ひながら葫蘆を取つて、口中に呪文を唱へて投げ上げたが、矢張そのまゝ地に落ちて來た。

『駄目、駄目！これは假物だ！』と言つて二妖の狼狽て廻る樣子を見て、行者は雲の上から葫蘆を取つて身へ戻してしまひました。

確かに落ちて來た筈の葫蘆が、また急に見えなくなつたので、愈々慌てゝ、草を分けて摸したが、影も形も見えないので、二妖は呆れて面を見合せて居た。

『何うしよう！』と伶俐蟲が言ふ。『此のまゝで回つたら、打殺されるにきまつて居る。』

『哥々は銀角大王のお氣に入りだから、』と精細鬼が言つた。『大王に歎願したら、生命だけは助けて下さるだらう。』

斯う話しながら二妖は悄々と洞へ回つて行きました。行者は其の後を見送ると、急に身を變じて一匹の蒼蠅となり、二妖に跟いて、蓮花洞へ飛んで行きました。

(八) 蓮花洞

孫行者は蒼蠅になつて蓮花洞へ飛込んで行くと、金角、銀角の兩魔王は、丁度酒を飲んで居たが、兩個の小妖が、恐る〳〵其の前へ叩頭をして、寶貝を奪はれた始末を話すのを聞いて、金角大王は雷のやうな聲をして、

『しまつた！しまつた！』と喚き立てる。『それは孫行者が拔け出して、仙人の姿になつて來て、汝等を騙したのだ。』

『あの猿め、如何して拔け出したものか？』と銀角は首を傾けたが、『よし〳〵また

捉へて呉れよう！』

『何うして捉へるつもりか？』と金角が尋ねる。

『兩個の寶貝は失つたが、まだ三件の寶貝があります。』と銀角が答へる。『七星劍と芭蕉扇は手許にありますし、槌金繩は壓龍洞の老母の處にありますから、卽刻使をやつて、唐僧の肉を馳走するからと言つて、老母に槌金繩を持つて來て貰ひませう。然うすればあの猴を捕へるのは何でもない！』

金角も有理と同意したので、銀角は伶俐蟲、精細鬼をやつて、巴山虎、倚海龍といふ二個の小妖を呼び出し、壓龍洞へ使者に立たせました。

此の間、行者は洞の隅へとまつて一伍一什を聞いて居たが、兩妖が洞を出て行くと、急に翅を展げて洞を飛出し、忽ち一個の小妖に變じて、兩妖と侶伴になつて行きました。半日ばかり行くと、行者は兩妖に向つて、

『まだ大分あるかね？』と尋ねる。

倚海龍は彼方を指して、

『あの林の裡だ！』といつて敎へる。

行者は之を聞くと、如意棒を取出して、兩妖を打殺し、一根の毛を拔いて巴山虎の姿に變じ、自分は倚海龍に變じて、林へ入つて行くと、一個の石門があつて、扉の半程開いた中から、一個の女の妖怪が出て來て、

『那里からおいででした？』と尋ねる。

『蓮花洞から使に參つたものです。』と行者が答へる。

女妖は行者を案内して、三層の門を入つて、一個の老媽の前へ連れて行きました。行者は其の前に跪いて大王の仰を受けて迎へに來た由を告げると、老妖は喜んで、直に轎へ乘つて出掛け

ました。やがて五六里ばかり行くと、轎夫は轎を下して、息を入れる。其隙を窺つて行者は如意棒を出すや否や、忽ち轎夫を打殺し、物音を聞いて老妖が轎から顔を出した處を又一打に打殺し、中から引出して見ると、九尾の狐でした。行者は槐金繩を捜し出して袖に收め、身を變じて老妖の姿となり、二根の毛を拔いて、巴山虎、倚海龍とし、又二根拔いて轎夫に變じ、轎に乘つて、悠々と蓮花洞へ乘り込んで行きました。

蓮花洞へ着くと、金角、銀角の兩魔王は、洞門の外へ出て轎を迎へ、行者を案内して正座に据ゑ、二大王を始め洞中の妖怪が殘らず其の前へ跪いて、恭しく禮拜しました。行者は故意と老妖の假聲を摸ねて、

『今日は懇なお迎へを受けて、こんな嬉しいことはない。』と言つたが、『さて今日の催しはどのやうな事ぞ？』と尋ねる。

『今朝東土の僧を捉へましたので、我們丈けで賞翫致すのも惜いと存じまして、母親へお出を願つて延壽の會を催すことに致したのです。』と金角が答へる。

言葉が終らないうちに、巡山の小妖們が慌急しく駈込んで來て、

『大王大變が出來ました。孫行者が老媽を殺して、老妖になつて來たやうです』と報告する。

魔王は聞くと等しく、七星劍を取つて、行者に砍りつけたが、行者は早く身を躱して、洞を逃げ出したので、金角は殘念がつて・後を追つて出ようとするのを、銀角は押止めて、

『哥々、あなたはまア此に居て洞を守つて居て下さい、私が行つて引捉へて來ますから』と言ふや否や、寶劍を執つて、洞門の外へ走り出した。

『孫行者、快く我が寶貝と母親を還せ！』

と銀角の呼ばはるのを聞いて、行者は空中から、

『此の妖怪、早く我が師父と法弟を還せ！』と罵り返す。

銀角は急に雲を飛ばして、空中へ跳上がり、寶劍を舞はして砍つてかゝると、行者も棒を取つて迎へ戰ひ、三十餘合に及んだが、容易に勝負が見えないので、行者は袖の中から先刻の梶金繩を取出して、銀角に向つて投げかけました。原來此の梶金繩を使ふには、緊繩呪と鬆繩呪の二つの呪文があつて、他人を縛る時には緊繩呪を念じて繩を緊め、自分が縛られるといふ時には、鬆繩呪を念じて繩を解くのですが、行者は固よりそんな事は夢にも知らなかつたので、只投げかけさへすればよいものと思つて居たのです。銀角は今行者が梶金繩を使ふのを見て、心の中で「しめた！」と思ひながら、急に鬆繩呪を念じて、繩を脫し、直に行者に投げかけて、口中に緊繩呪を念じたので、繩は見る間に行者の頸へ纏ひ着いて、さながら金圈を嵌められたやうに、身動きも出來なくなりました。

銀角は繩を執つて雲を下るや否や、行者を曳いて、勝誇つて洞へ引上げて來て、

『哥々、行者を捉へて來た。』と門外から大聲を揚げて叫びました。

金角は此の聲を聞くと跳んで出て、行者を見て大に喜び、先づ身中を査べて、葫蘆と淨瓶を搜し出した後、柱へ縛りつけて置いて、後面へ入つて酒宴を開きました。

行者は柱に縛られながら、ひとりになると、直に耳から鐵棒を出して、小さな鑢に變じ、かの頸圈を磨斷つて、やう〳〵縄から脫け出し、一根の毛を拔いて自分の假身にして置き、自分は小妖に變じて、後面へ入つて行つた。

『孫行者はあの柱の所で頻に爬ひ廻つて、縄を磨斷らうとして居りますから、もつと丈夫な縄と取換へた方がよからうと思ひます。』と行者が言つた。

金角は之を聞いて、と腰に結んだ獅蠻帶を解いて行者に與へたので、行者は直に元の處へ回つて、棍金縄を解いて、袂へ收ひ、獅蠻帶で假行者を縛つてしまふと、一根の毛を棍金縄に變じて大王の前へ持つて行きました。金角大王が假物とも知らずに縄を受取つたのを見ると、行者は急いで洞外へ出て、原身を現し、大聲を揚げて、

『妖怪出ろ！　孫行者の弟者行孫だぞ！』と叫ぶ。

小妖が奥へ跑込んで此の由を傳へると、金角は不審な顏をして、

『孫行者は柱へ縛つてある筈だが、者行孫といふのは何者か？』と頭を傾げる。

銀角は之を見て、

『哥々、心配することはない！　私が葫蘆へ裝閉んで來ませう。』

と直に葫蘆を取つて洞を出て、行者を見て、

『汝は何者だ？』と尋ねる。

『孫行者の弟者行孫といふ者だ。兄が捕はれたと聞いて、仇を報ひに來たのだ！』

『仇を報ひに來たと言つても、俺は汝の相手になるのは御免だ。』と銀角が言ふ。『今爰で一聲汝の名を呼んで見るが、汝は返事をする氣があるか？』

『返事をするとも！』

と行者の答へるのを聞いて、魔王は「しめた！」と思つて、直に雲に飛乘り、葫蘆の底を天に向け、口を地に向けて、一聲高く『者行孫』と呼ぶ。行者が返事をしないので、魔王はまた一聲呼ぶ。此の時行者は心の中で、『俺の名は孫行者で、者行孫といふのは僞名だから、返事をしても差支へはなからう』と思つたので、『應』と一聲答へると、忽ち葫蘆の中へ吸込まれてしまひました。原來此の寶具は名の眞僞を問はず、只相手に答へる氣さへあれば、直に裝入れる靈妙の力を有つて居るのを、行者は知る筈

海の火

かなかつたのです。銀角は行者が裝込まれたのを見ると、上へ帖兒を貼つて、洞へ持回りました。

行者は葫蘆の中で、身邊を見廻したが、只眞黑闇で何も見えませんけれども、心の中で思ふには、『五百年前に老君の八卦爐で煉成げた身だ、此の葫蘆は假令一時三刻の中に人間を溶かす力があるにしても、俺の身を溶かすことは出來はしまい。まあ、封を開くのを待つて跳出してやらう』と度胸を据ゑて居るうちに、銀角は蓮花洞へ回つて、

『哥々、者行孫を葫蘆へ裝込んで來たから、もう大丈夫だ！』

『すつかり溶けるまでそつとして置くがいゝ、其のうちに搖つて見て、水になつて居たら封を切らう。』

斯う言つて兩魔王は再び酒宴を始めたが、いつまで經つても搖つて見る樣子がないので、行者は忍へかねて、葫蘆の中から泣聲を立てゝ

『あゝ、とう〳〵腰骨まで溶けて來た！』といふ。

『腰骨まで溶けるやうなら、もうすつかり溶けたらう。』と金角が聞きつけて言つた。

『帖兒を剝いで見るがいゝ。』

行者は直に一根の毛を拔いて半截の姿を造へ、自分は小さな羽蟲になつて、葫蘆の口元に止つて居たが、銀角が帖兒を剝がすや否や飛出して、小妖の姿になつて大王の傍に坐つて居ました。金角は葫蘆の中を覗いて見ると、まだ半截の身が殘つて居るので、忙いで銀角の手へ返して、『まだ溶けきらない！』といふ。

銀角はもう一度封をして、葫蘆を小妖に預けて、又酒宴にかゝりました。

此の時行者は巧く小妖に化けて、銀角から葫蘆を受取つたので、隙を見て眞物の葫蘆を袂へ隱し、毛を拔いて假の葫蘆を作り、暫くは手に捧げて坐つて居たが、兩魔王の醉つて來た樣子を見澄して、窃と席を立ち、寶貝を持つて蓮花洞を跳出しました。

（九）火の海

孫行者は門外へ出ると、急に本相を現はして、大聲を擧げるので、小妖們は驚いて、門の中から覗きながら、

『門前を騒がすのは何物だ？』と誰何める。

『汝們の魔王に、者行孫の弟行者孫が來たと告げよ。』と行者が叫ぶ。

小妖們が洞の奥へ跑込んで、此の由を大王に通じると、金角は驚いて銀角に向ひ、

『賢弟、今度の奴は何うして捉へるつもりか？』

『哥々、安心なさい、此の葫蘆は一千人までは裝れるのですから、一緒に此の裡へ裝入んで來ませう。』

と言棄てて、銀角は直に門外へ駈け出した。

『如何様に騒いでも、汝なぞの相手にはならんぞ！』と銀角は行者を見て言つた。

『只爰で一聲汝の名を呼ぶが、返事をするかどうだ？』

『汝が呼ぶなら、如何にも返事をしよう。』と行者は笑つて答へる。『だが俺が呼んだら汝も返事をするか？』

銀角は呵々と笑つて、

『俺が汝を呼ぶには、一箇の葫蘆があつて、人を裝るのだが、汝は何を有つて居て俺を呼ぶのか？』

『俺にも一個の葫蘆がある。汝のは雌だが、俺のは雄だ。』と行者が答へた。『まあ汝から先へ呼んで見ろ！』

銀角は直に空へ跳り上つて、一聲高く、『行者孫』と呼ぶ。行者は八九回續けて答へたけれども、一向に裝られた様子がないので、銀角は驚いて急に雲を下り、地に倒れて天を呪つて居る。行者は此の様子を見て心中に笑ひながら、

『まア、起きろ！　今度は俺の番だぞ！』

と急に觔斗雲に駕つて空に上り、眞物の葫蘆を執つて、底を天に向け、口を地に向けて、一聲高く、『銀角大王』と呼ぶ。魔王が『應』と一聲答へるや否や、忽ち葫蘆へ吸込まれたので、行者は直に『太上老君急々如律令奉勅』の帖兒を貼つて雲を下り、蓮花洞の前へ行つて葫蘆を搖つて見せると、小妖們は急に奥へ跑込んで、

『大王、大變が出來ました。行者孫が銀角大王を葫蘆の裡へ裝つて、門外へ參りました』と報告する。

金角大王は之を聞くと、忽ち地に倒れて慟哭したが、やがて憤然として跳起きるや否や、芭蕉扇を腰へ挿み、七星劍を提げて洞の外へ跳り出で、行者を目掛けて砍

つてかゝる。行者も鐵棒を取つて交戰ひ、二十合ばかりも戰つたが、此の時洞中の小妖們が一齊に行者を圍んで、打つてかゝるのを見て、行者は身外身の法を使ひ、一把みの毛を拔いて、無數の行者にして、群る敵を打拂ふ。金角は急に芭蕉扇を取り出し、南方丙丁の方位を望んで煽ぎ立てると、忽ち地上一面の火となつて、焰々と燃え上る。行者は此の怖ろしい火に逢つて心に驚き、急に毫毛を取り收め、只二根の毛を變じて假身に殘し、自分は觔斗雲に跳上つて蓮花洞へ引返し、支へる小妖們を悉く打殺して、奥へ進み、師父の在所を尋ねるうちに、忽ち一隅から金色の光を放つ物があるので、近寄つて見ると、かの羊脂玉瓶淨でした。行者はいきなり其の寶貝を取つて洞外へ出ると、魔王は丁度南の方から洞を指して回つて來たので、行者は觔斗雲に駕つて山の方へ避け、淨瓶をしかと腰へ結びつけて、再び洞へ回り、窃と奥へ入つて見ると、大王は石案に凭れて昏々と睡つて居ます。行者は忍び寄つて、芭蕉扇を拔き取り、急いで洞を出て來ると、大王は其の足音に目を醒まし、急に劒を執つて赶つて來ました。行者は扇を腰に挿し、如意棒を取つて、金角と交戰ふこと三四十合に及んだが、金角は行者の棒に敵しかね、西南の方を望ん

で逃げ出した。行者は敵が壓龍洞へ逃げ込んだのを見屆けて、再び蓮花洞へ取つて返し、三藏師弟を尋ね出し、素齋を調へて空腹を充たし、洞の中で一夜を明しました。

さて翌朝になると　金角大王は壓龍山の女怪を集め、死んだ老媽の弟狐阿七大王を先鋒として蓮花洞へ押寄せて來ました。行者は早くも其の氣勢を覺り、沙和尚を留めて師父を守らせ、八戒を引率れて打つて出で、先づ狐阿七と戰ふ所へ、金角は群妖を下知して、兩人を包んで、四方から攻めかゝる。沙僧は洞中から此の有樣を見て、急に寶杖を揮つて、兩人を扶けたので群妖は不意を打たれて、亂れ立つた。狐阿七は身方の不利と見て、急に身を回して逃げようとする所を、八戒は釘鈀を差伸べて引倒し、打殺して見ると一頭の老狐でした。此の時金角は行者と戰つて居たが、狐阿七の討たれたのを見ると、急に行者を棄てて八戒に向ひ、暫くの間は八戒沙和尚の兩個を相手に戰つたが、遂に敵はなくなつて南を指して逃げ出した。行者は之を見て急に空中へ跳上り、腰の淨瓶を解いて、口を地に向けながら、一聲『金角大王』と呼ぶ。大王は小妖が呼んだのだと思つて、回頭つて『應』と一聲答へると、

忽ち淨瓶の中へ裝入まれてしまふ。行者は直に帖子を貼つて雲から下り、魔王の落した七星劍を拾つて、洞へ回り、三藏に此の始末を話して安心させ、一同齋飯を濟まして、蓮花洞を立出でました。

師弟四人は山路へ出て、暫く行くと、忽ち空中から聲が聞えて、

『孫行者、寶貝を還せ！』といふ。

行者は驚いて空を見ると、太上老君が雲の上に立つて居るので、直に雲に駕つて空に上り、老君の前に禮を施して、其の譯を尋ねると、老君は笑ひながら、

『あの葫蘆は仙丹を盛る器、淨瓶は水を入れる器、寶劍は丹を煉る具、扇子は火を煽ぐ具、又繩は袍を勒める帶で、又あの兩個の妖魔は、一個は金爐の童子、一個は銀爐の童子なのだ。』と說明した。『兩個の童子は先頃我の寶貝を偸んで下界へ走つたきり、更に行衞が分らなかつたが、今日圖らず汝の手で捉へられた次第ぢや。』

行者は聞いて、嚇と腹を立つた。

『此の老官兒、然う無暗に家奴を手放して他人の害をさせて何うするのだ！と』言つて老君の罪を責める。『お前の不取締からどんなに俺に骨を折らしたと思ふ？』

『我の知つた事ではない！』と老君は笑ひながら言ふ。『つまり汝們師弟に魔障の難があつて、此の難に遭はないでは、正果を就成することが出來ないのぢや。』

行者は之を聞いて初めて悟り、五件の寶貝を出して、老君に還すと、老君は葫蘆と淨瓶の口を開き、中から二個の童子を出し、引連れて天上へ回つて行きました。行者は直に地へ下り立つて、師父の前へ行き、老君の話の始終を話すと、三藏は大に感謝して、馬へ乘つて西に向ひました。

（一〇）國王の靈

三

藏師弟は、平頂山を過ぎて、數日の間西へ進むと、一日の暮方、山の凹處に當つて、立派な一廓の建物が見えて來ました。近づいて見ると一座の寺院でしたから、三藏は馬を下りて山門の前へ進むと、門上に『勅賜寶林寺』といふ五個の大字が見えました。師弟は山門を入つて行くと、左右には一對の金剛を据ゑ、二層の門には四天王の像を安置した。其處を過ぎて、大雄寶殿に進み、三藏は合掌して佛を拜し、更に佛の臺座を廻ると、後面には觀音菩薩の像がありました。其の

時一個の僧が旁門の中から出て來るのを見て、三藏は、唐王の命を受けて西天へ往く者だと告げて、一宿を賴んだので、寺僧は師弟を方丈に導き、齊を供へて管待した後、禪堂へ案内して呉れました。

其の夜三藏は、三人の徒弟を先づ睡らせ、ひとり經を開いて、靜かに讀んで居ましたが、三更の頃になると、三藏は晝の疲れが出て、昏々と案に凭れて睡りました。此時一陣の風が颯と門外を吹き過ぎたと思ふうちに、室内の燈火がゆらめいて、明るくなり、又暗くなるのを、三藏は夢のやうに知つて居たが、忽ち耳邊で誰か自分を呼ぶ聲が聞えたので、驚い

て頭を上げると、門外に一人の漢子が、渾身水浸しになり、眼に涙を流して悄然と立つて居ました。三藏は屹と看て、

『汝妖怪早く立去れ！　我が禪門に近づくな！』と一喝する。

『私は、妖怪ではありません。』と其の人が答へる。『師父、何卒私の樣子をよく御覽下さい！』

三藏は睛を定めて看ると、頭には冲天冠を戴き、腰には碧玉帶を束ね、身には赭黃袍を着、足には無憂履を踏き、手には白玉珪を執つて居る樣子が、擬ふ方もない一國の王なので、三藏は驚いて尋ねた。

『何國ぞの天子と見受けますが、何で此處へは入らせられた？』

『此處から四十里を隔てゝ、一座の都があります。名を烏鷄國と申して、私は其の國の王です。』と其の人は涙を流しながら答へる。『五年前に國内に旱魃があつて多くの民が飢ゑて死にました。寡人は、天に祈り、地に禱つて、民のために雨を請ひましたが、何の效もなく、三年の間一滴の雨も降りません。然るに此の年鍾南山に一個の神仙が現れ、法力を以て風を喚び、雨を呼ぶといふ風說を聞き、招いて雨を祈ら

せると、頃刻にして大雨がありました。寡人は彼れと兄弟の契を結び、宮中に留めて二年を過ごしますうちに、一日彼れと只二人で、春を愛でゝ花園を遊覽するうちに、八角の瑠璃井の側まで行くと、井の底から金色の光が射して來ました。彼れは井の底に寶貝があると言つて、寡人に中を覗かせながら、不意に井の內へ突落し、井の口を石板で閉ぎ、泥口をのせて、上に一株の芭蕉を栽ゑ、己れは寡人の姿に變じて、百官後宮に臨み、既に三年の間國王と崇められて居るのです。』

三藏は話を聞いて、思はず身毛を慄立てながら、王に向つて、

『然ういふことならば、何故に閻王の前へ出てお訴へにならないのです？』と尋ねる。

『所が、彼れには廣大な神通力があつて、閻羅王とも故舊なので、訴へる處がないのです。すると今宵、夜遊神が私を此處へ送りながら申しますには、三年の水災がやつと滿ちたから、師父に拜謁してよく願つて見よ、徒弟の一人に齊天大聖といふ方があつて、魔を降すに妙を得て居るといふことでありました。何卒我國へおいで下すつて、妖魔を取住へ、正邪を辨けて頂きたい。』

『如何にも私の徒弟には降魔の術がありますが、只一つ困つた事は、妖魔が國王の姿に變じて、群臣百官の目を瞞まして居るとすれば、粗忽に手出しは出來ますまい。』

『寡人に一個の太子があります。此の三年の間、妖怪のために、母と逢ふことを禁じられて居りますが、明朝太子は獵に出て、必ず此處へまゐり、師父を拜するでありませう。師父から只今の物語を太子にお傳へ下すつたら必ず信じるに相違ありません。若しそれでも信じないやうでしたら、此の白玉珪を見せて證據にして下さい。』

と王は手に持つた玉珪を三藏に渡したので、三藏は珪を受けて、其の依囑を應承けると、王は喜んで、

『これから夜遊神に賴んで皇宮へ行き、皇后の夢想に立つて、太子と意を合せて魔を退けるやうに言聞かせて置きませう。』

と言つて、別れて行つたと思ふと、三藏は忽ち目が醒めました。

三藏は夢中の不思議に驚き、急に徒弟を呼起して、夢の話をすると、行者は熟々と聞いて、起つて門の所へ往き、外を見ると、堦の上に果して一個の白玉珪が置いてあつたので、行者は執り上げて師父の前へ還つて來た。

『斯ういふ證據がある上は、疑ふ所はありません、明日は妖怪を捉へませう。』と言ひつゝ、行者は一根の毛を拔いて、一個の紅金漆の匣となし、玉珪を其の內へ收つて、三藏に渡し、『師父は明日此の匣を捧げ、錦襴の袈裟を掛けて正殿に上り、太子の來るのを待つて居て下さい。』と言つて、尙ほも太子に會つて、此話を聞かせるまでの手段を細かに打合はせました。

やがて夜が明けると、行者は雲に駕つて出て行きましたが、暫くして城の東門から一隊の人が獵裝束を着けて出て來るのを認め、時刻を計つて身を白兎に變じて、太子の馬の前へ跳出し、太子を誘つて寶林寺へ連れて來ました。やがて寺の前へ來ると、行者は忽ち本相を現して正殿へ入り、三藏に太子の來ることを告げ、身を二寸ばかりの小坊主に變じて、匣の中へ入つて待つて居ます。程なく太子は寶林寺へ着き、山門で馬を下り、衆僧に迎へられて正殿へ入りましたが、佛像を拜して、不圖目を擧げると、正面に一個の和尙が坐つて居るので、臣下に命じて引下させ、

『汝は何處の者だ？』と詰問する。

和尙は太子の前へ頭を下げて、

『貧僧は東土大唐の僧で、西方に上つて佛を拜し、寶を獻る者です』と答へる。

『寶といふのは何か？』

『此の匣の裡に一件の寶貝があります。立帝貨と申して、よく過去未來の事を知つて居りますから、試みに尋ねて御覽じませ。』と言つて、三藏は手に持つた匣の蓋を開くと、行者は匣の裡から跳出して、右に左に走り廻る。

『此のやうな小人が何を知らう？』と太子は嘲笑つて言つた。

聞くや否や、行者は忽ち腰を伸ばして五六尺の丈になつて、太子の前へ立ち上つた。太子は多少心に驚いて、

『立帝貨和尙、過去未來の事を知るならば、試みに我國の事を言つて見よ！』と言ふ。

『汝は烏鷄國の太子だ。』と和尙は言下に言つた。『五年前に旱魃があつて、鐘南山の道士が祈つて雨を降らしたので、國王は道士を拜して兄弟の契を結んだことがあらう？』

『如何にも其の通り！』

『後二年經つて道士の姿が消えてしまつたらう？　今王となつて居るのを誰だと思ふ？』

『皇帝は我が父だ！』

此の答を聞くと、行者は急に笑ひ出したので、太子は怒つて、

『何で物も言はずに笑つて居るのだ？』といふ。

『これにはちと仔細がある。』と和尚は言つたが、『先づ人々を遠ざけて下さい。』

太子は和尚の言葉に據處のあるのを見て、人馬を門外に退けたので、正殿に殘つたのは三藏と行者と太子だけになりました。此の時行者は太子に向つて　かの姿を消したのは王で、今王となつて居るのは、其の實かの道士だといふことを說き聞かしたけれども、太子は信じきれずに疑つて居る樣子を見て、行者は三藏に目くばせすると、三藏は白玉珪を出して太子に獻じました。

太子は玉珪を手に取つて、

『此の寶貝は、三年前にかの道士が偸んで行つた物に相違ない。これが何うして和尚の手に入つたのか？』

と驚き異む樣子を見て、行者は太子の前に身を進めて、

『立帝貨と言つたのは假の名で、實は此の長老の大徒弟孫行者といふ者です。』と誠の姓名を名乘り、昨夜の夢の事を細かに話して、『殿下を宮中に入れないのも、花園を閉して人の出入を禁じたのも、かの妖怪が己の惡事の漏れることを恐れるためです。これでも尙ほお疑があるならば、國母に會つて、只一言、夫婦の情愛に、三年前と比べて異つた所はないか、どうか尋ねて見たら、直に眞僞が判別するでせう。』此の話を聞くと、太子は顏色を變へて立上がり、玉珪を持つて出掛けようとするのを、行者は尙ほも引止めて、

『事の洩れるのを防ぐために、人馬は總て玆へ置いて、單身で城へ回り、後門から竊と宮中へ入り、國母に會つても、決して高い聲を出さぬやうに注意しなくてはなりません。若し妖怪に覺られたら、母子の生命にも拘るでせう。』と言含める。太子は一々に行者の敎に遵ひ、山門を出ると臣下に吩付けて、寶林寺の門前に屯して主の歸りを待たせ、單身馬に上つて城を指して走りました。

（一一）青毛獅子

太子は寶林寺を出ると、馬に鞭を當てゝ城へ回り、後門から窃と宮中へ入ると、皇后は太子の姿を見て、懷しげに立て迎へる、太子は母の前に跪いて、

『只一言お尋ねしたいことがあつて參りました。』と言ふ。『萬望、少時左右の人を遠ざけていたゞき度い。』

皇后が侍女らを去らせると、太子は膝を進めて、低聲になり、

『母上、三年前と、今日と、父上の情愛に何か異つた事はありませんか？』と尋ねる。

『何うしても一つ解せない事があります。』と皇后は眼中に涙を浮べて答へた。『汝に尋ねられたから言ふが、三年前には皇帝の身が溫かであつたが　三年以來まるで氷のやうに冷たくなりました。度々此事を尋ねて見ても、只年老つて身が衰つたといふばかりで、一向に不審が晴れないのです。』

『さては　愈　妖精に相違ない！』と太子は點頭きつゝ袖の中から玉珪を出して、母に渡し、唐僧の夢の事を一通り話すと、皇后は又涙を流して、

『私も昨夜王が水に濡れて私の前へ立つた所を夢に見ました。其の時王は矢張唐僧に逢つて妖怪を降すことを賴んで置いたと告げられたが、今汝の話を聞いてすつかり不審が解けました。』と言つた。『では直に其の唐僧を請じて來て、妖魔を掃ひ、父王の仇を報いて下さい。』

太子は急いで馬に乘つて、寶林寺へ立回り、行者を見て母に會つて聞いた始終を話し、仇討のことを賴みますと、行者は委細承知して、

『今日はもう晩くなつたから、明朝城へ行くことにします。殿下は一先づ城へ回つて待つてゐて下さい。』と言つたが、急

に呪文を唱へて山神地神を喚出して、太子に狩の獲物を與へよと命じたので、太子の一行は途すがら數多の獲物を捕へつゝ、喜び勇んで王城へ回りました。

此の夜行者は八戒を賺して、共に城中へ入込み、花園の中へ入つて四圍を見廻すと、果して一株の芭蕉がありました。行者は八戒に命じて、芭蕉を突倒し、土を掘つて石板を取除けさせると、其の下は井になつて居るので、如意棒を七八丈の長さに伸ばし、それを傳はつて井の底へ下つて國王の屍骸を運び出させ、風を起して再び寶林寺へ回りました。三藏は立寄つて其の姿を見ると、國王の容貌は活きた人のやうで、毫しも變つて居ないので、行者を見て言つた。

『起死回生の法があらば、早く此の王を蘇生らせよ。』

「此の國王は死んでから三年になります、何として救ふことが出來ませう？』

三藏も行者の言ふのを有理とは思つたが、又國王の容顏がまるで活きて居るやうなのを見ると、覺えず涙を流して憐れがり、終には緊箍呪を唱へようと言つて嚇すので、行者も餘儀なく樣々の工夫を廻らした末、雲に駕つて天上界に上り、太上老君の許へ行つて、一粒の還魂丹を貰つて來て、國王の口に含ませ、水を灌いで流し込

むと、少時して王は蘇生り、一聲『師父！』と叫んで、三藏の前へ跪きました。三藏は慌てゝ王の手を執つて上座に坐らせ、寺僧を呼んで、一伍一什を話した後、布の直綴と一條の帶と一足の草鞋を取寄せて、王の衣冠と着替させ、衣冠は其のまゝ寺僧に預けて、後日の賞賜の證據としました。

此の時にはもう夜が明けて居たので、寺僧に命じて早齋を運ばせ、五人揃つて寶林寺を出立しました。一行は程なく鳥雞國の都城に入り、宮城の門に進んで關文を出すと、黃門官が傳奏いで、五人を國王の前へ連れて行きます。五人はつかつかと國王の前へ進んだが、挺立かつたまゝ禮もしないので、百官は心の中で、「無禮な和尚們だ、王の前へ出ても拜をしない」と思つて居ると、魔王は別に答める樣子もなく、

『和尚は何方から來られたな？』と問ひかける。

『東土唐王の命を受け、西天に往いて、佛を拜し、經を求める者です。』と行者が答へる。

魔王は通關文牒と見比べながら、屹と五人を見て、

『此の四個の和尚は仔細はないが、其の一個の道人は不審な點がある。』と言つたが、
『何方の者で、姓名は何と申すか、引出して口供を取れ』と左右に命じる。
行者は急に身を進めて、
『此の老人は聾で、啞です。此の者の素性は私がよく知つて居りますから、私が替はつて口供を致しませう。』と言つて、次のやうな口供を作りました。
『此の道人は年老いて、聾で、啞です。家はありません。原は此の地の者でしたが、五年前に旱魃があつて民が多く死にました。此の時鐘南山に神仙が現れ、風を呼び、雨を喚んで、神通を顯しましたが、其の後暗かに彼れを害して、花園の井中へ落しました。其後龍宮に留られて三年を過ぎましたが、幸に私が來て起死回生の法を施して、また法界に歸らせ、今日王城へ參つて、眞僞を辨ち、王を扶け、妖怪を滅ぼして、御代の安泰を圖らうとするのです。』
魔王は此の口供を聽くと、吃驚して、急に寶劍を帶び、雲に駕つて、空の方へ逃げ去つた。八戒、沙僧は之を見て、大聲を擧げて喚き立てるのを、行者は制して、
『兄弟、騒ぐには及ばない。老孫が妖怪を捉へて來る間に、太子を呼んで父を拜さ

せ、國母を招いて王に會はせて置いて下さい。』
と言棄てゝ、雲に跳上つて四方を見廻すと、魔王は東北を指して走つて行くので、直に追掛けて、棒を舞はして打ちかゝり、空中に在つて戰ふこと數合に及んだ時、魔王は急に身を躱して城中へ跳下り、文武百官の中へ入つて、三藏と同じやうな姿に變じて立つて居ました。行者は追つて來て見ると、兩個の三藏が居て、どちらが假か辨別がつかないので、迂濶に棒を揮ふことも出來ずに焦躁して居ると、八戒は急に笑ひ出して、
『哥々は俺の事を獃子々々と言ふが、お前は俺よりも、獃子ぢやないか。』と言ふ。
『若し眞實の師父を知りたかつたら、些しばかり頭の疼いのを忍へて、あの呪語を唱へさせて見たらいゝではないか。』
行者は之を聞いて有理と思ひ、兩個の三藏に緊箍呪を唱へさせると、果して眞の三藏が唱へると行者は頭を抱へて『疼い、疼い！』といつたが、假の三藏の呪文では些の疼みも感じないので、八戒は直に妖怪を見別けて、鈀を擧げて撞きかゝる。魔王は再び空中へ跳上つて逃去す所を、八戒沙僧が追ひ上つて左右から夾み攻め、行者

もつづいて打ちかゝらうとすると　其の時東北の方に當つて、一朶の彩雲が現れ、裡から

『孫悟空、旦く待て！』

といふ聲が聞えて來ました。行者は頭を上げて見ると、雲の上には文殊菩薩が立つて居るので、急に棒を收つて、前へ進んで禮をする。菩薩は行者を見て言つた。

『悟空、其の妖怪は私が連れて行く。』

『此の妖怪は何物です』

『私の駕つてゐる青毛の獅子だが、如來の仰を受けて此國へ來て居たのだ。』と文殊菩薩は說明する。『初め此の國の王はよく僧に供養するので、如來の仰せを受けて私が濟度に來たことがあるのだ。私は僧の姿になつて來て、齋を化ひ、故意と王に向つて種々と詰りかけると　果ては私を縛つて、三日三夜の間御水河に浸したので、如來は此の妖怪に命じて王を井の底に沈め　三年の間水に浸して、私の三日の水災に報いたのだ。』

行者は菩薩の說明を聞いて　深く因果の理を悟り、謹んでお請をする。文殊菩薩は

妖怪に向つて、

『畜生正に歸せよ！』

と一喝すると、妖怪は忽ち原身を現はして、青毛の獅子となり、文殊を乘せて走つて行きました。

さて行者は八戒、沙僧と共に、雲を下りて朝廷へ歸り、文殊菩薩が妖怪を連れて歸つた次第を話して居る所へ、黃門官が出て、今門外へ四人の和尙が來たと告げるので、直に召し入れると、これは寶林寺の僧が、王の衣冠を棒げて來たのでした。行者は國王に向つて道服を脫いで、王の衣冠を着けるやうに勸めると、國王は階の下へ跪い

て、哭いて言ふには、

『私は三年前に死んだ身です。今幸に師父の救ひを受けて、回生りましたとにいへ、何うして王位を踐むことが出來ませう。』

斯う言つて王は先づ三藏に國を讓らうとしたが、三藏の辭して受けないのを見て、更に行者を君に戴かうと言つたが、行者も受けないので、餘儀なく再び王冠を戴き、天下に大赦を行ひ　寶林寺の僧には恩賞を與へて寺へ回らせ、東閣に酒宴を開して、三藏師弟を款待しました。

翌日三藏は馬に上つて王宮を出立すると、國王、太子を初め、群臣百官が師弟を城外まで送つて來て、金銀や寶貝を贈つて餞別にしましたが、三藏は毫も受けず、君臣に別れて西へ進みました。

水難火難

第五　水難火難

(一)　紅孩兒

一二

藏師弟は烏鷄國を出て西に行くこと半月餘りで、一座の高山にかゝりました。此の時秋が過ぎて、冬の初めでしたが、險阻な山路に行惱みつゝ一里ばかりも上つて行くと、忽ち林の中から小兒の悲鳴が聞えるので、三藏は馬上から聲のする方へ眼を注ぐと、とある大木の枝に、七歳ばかりの童兒が、赤身のまゝ弔されて、悲鳴を擧げて居ます。三藏は樹の下へ進み寄つて、

『汝は何家の孩兒だ？　何うしてこんな處へ弔されて居るのか？』と尋ねる。

『私の家は此の山の西にあります。父親は紅十萬といふのですが、盜賊が入つて父親を殺し、母親を連れて行つてしまひました。私も盜賊に此處まで連れて來られて、斯うして三日の間弔下げられて居るのです。』と童兒は理由を話した。『和尚樣、早く繩を斷つて家まで連れてつて下さい。』

妖怪の捕へし孩兒を救ふ

三藏は童兒の話を聞くと、可哀想でたまらなくなつて、直に八戒に吩付けて繩を解いて助け下させたが、童兒は全身が疼んで歩けないといふので、行者に命じて駄つて行かせました。

行者は先刻から童兒の樣子を見て、早くも妖精だと覺つたので、駄ひながら、隙を見て投殺して呉れようと思ふ心の中を、妖精は早くも見拔いて、急に身を變じて千斤の重さにし、本身は空中へ飛退いて樣子を窺つて居ました。行者は背上の童兒が急に重くなつたので、いきなり石の角へ投付けると、此の時妖怪は空中から此の有樣を見て、俄に一陣の旋風を起し、石を飛ばし、砂を揚げ、八戒、沙僧が面を地へ付けて、風を避けて居る隙に、三藏を攫つて行つてしまひました。霎時して風が息み、日の色が明るくなつて來たので、行者は急いで三藏の側へ跑付けて見ると、何處へ行つたかもう踪跡がないので、大に八戒、沙僧を罵り、

『今の風はあの樹の上に居た孩兒の所爲だ。老孫は妖精だと見拔いて投殺さうとしたのだが、間に合はなかつた。』と齒噛をして悔しがつたが、『兎に角あの妖精を搜して、師父を救はなくてはならん。』

と八戒、沙僧を急がせて山を上つて行きました。三人は山中を尋ねながら、五六十里も進んだが、更に踪跡が分らないので、行者は訣を結び、呪文を唱へて、山神地神を喚出して尋ねると、山神地神は土へ手を突いて答へるには、

『此の山は鑽頭號山と呼び、山中に枯松澗といふ谷河があつて、其の邊に火雲洞といふ洞があります。只今の妖精は此の洞を住所として、始終我們を苦しめ、追使つて居ります。』

『全體あれは何處から來た妖精で、名を何と呼ぶのか！』

『あれは牛魔王の兒で、羅刹女に養育され、火焰山で三百年の修行を積んで、三昧眞火を煉り上げた者です。名は紅孩兒と申し、別に聖嬰大王とも號して居りますが、牛魔王が此の山の鎮守に此處へよこしてある位で、中々神通廣大な妖魔です。』

行者は之を聞くと直に山神地神を退かせ、八戒、沙僧に向つて、

『妖精は牛魔王の兒子だといふことだが、牛魔王とは五百年前に兄弟の約を結んだことがあるから、其の兒子ならつまり老孫の姪だ。』と言ふ。『すれば滅多に師父を害するやうなこともあるまいから、早く行つて尋ねて見よう。』

三人は路を急いで、百餘里を進むと、忽ち松林の中に一條の澗があつて、其の彼岸に一個の洞府が見えたので、これが妖精の住所に相違ないと見定めて、沙僧には馬と行李の番をさせ、行者と八戒は、澗を跳越えて洞の前へ進むと、門外に一個の石碣があつて、『號山枯松澗火雲洞』といふ八個の大字が鐫りつけてありました。小妖們は兩個の和尚の姿を見ると、洞裡へ跑込んで行つたが、程なく大勢の小妖が門の中から五輛の小車を推出して來て、門前へ並べると見る間に、魔王は手に一桿の火尖鎗を執つて、門前へ跳り出した。行者は熟々其の有樣を見

ると、面は白粉をつけたかと思ふ程に白く、唇は朱を塗つたやうに赤く、青雲の鬢、新月の眉、まるで女かと思はれるやうな美しさです。魔王は兩個を見ると大聲を擧げて、『何者か？』と呼掛けるので、行者は笑ひながら、

『賢姪よ、親類の情誼を思つて、早く師父を出して、返して貰ひたい。』といふ。

妖魔は聞いて、目を怒らして、

『此の猿、汝と親類になつた覺えはない』と一喝する。『汝に姪などと呼ばれる理由はない。』

行者は尙ほも笑顏を見せて、

『それはお前が知らないからだ。』といつた。『俺は五百年前大に天宮を鬧がした齋天大聖孫悟空だ。當時天下の豪傑と交はり、お前の尊父の牛魔王とも兄弟の契を結んだが、それはお前の生れない先の事だ。』

妖魔は行者の言ふことを信じないやうに、忽ち火尖鎗を擧げて突きかけて來るので、行者も棒を執つて交戰ひ、二十餘合を交へるうちに、八戒は傍から敵の勢の弱つた所へ附込んで、鈀を擧げて打ちかゝつた。妖精は之を見ると急に鎗を曳し

て退いたが、行者と八戒が赶ひかけて洞の前まで來たと見ると、忽ち片手に鎗を擧げて、中間の車の上へ立上り、片手を握つて鼻の上へ着けながら、呪文を唱へて口中から火を噴き出し、鼻からは烟を吐き、見る間に五輛の車を火焰と化して、火雲洞を濃烟の裡に包んでしまひました。八戒は慌てゝ

『哥々、此の火の裡へ入つたら迚も無事には出られない、逃げよう〳〵。』

と言ひながら、澗を跳越えて逃げて行つた。行者はひとり踏止まつて、避火の訣を結んで火中に跳り込み、妖精の行衞を搜さうとすると、妖精は愈々盛んに火烟を噴き出すので、流石の行者も遂に洞門を見ることが出來ず、急に身を轉して火の中から逃げ出した。妖精も之を見ると、火具を取纏めて、洞の裡へ引上げました。

さて行者は枯松澗を跨越えて、八戒、沙僧の居る所へ回り、三人額を集めて相談したが、兎に角敵の火勢を防ぐには、水を以て尅す外はないといふことになつたので、行者は觔斗雲を飛ばして東海龍王の宮へ行き、始終を話して三海龍王を加勢に賴んで枯松澗へ引返して來ました。其處で行者は再び澗を跳越えて洞門へ攻寄せると、紅孩兒は鎗を挺げ、小妖に火車を推させて門外に立出で、又もや行者と交戰つて二

十餘合も戰つた後、車に跳上つて火を噴き初める。行者は之を見て、急に龍王を呼んで雨を降注がしたが、不思議な事には、火勢は水に遇つても弱らないばかりか、却つて勢を加へて、まるで油でも灑いだやうに、益々盛んになるばかりでした。行者は訣を結んで火中を撞入り、敵を尋ねて打殺さうとすると、妖精は行者の面を目がけて一口の烟を噛きつけた。行者は急に面を反向けて避けたけれども、その時にはもう烟が目に入つて涙が瀧のやうに流れ、どうしても眼が開いて居られないので、餘儀なく雲に駕つて空へ逃げ上ると、妖精も火車を纏めて洞府へ引上げました。

行者は一旦空へ逃げたが、全身が妖火に燒かれて、熱くてたまらないので、直に澗水へ跳込んで火氣を消さうとすると、急に冷い水に逢つたために、火氣が心に籠つて、忽ち息が塞がつてしまひました。三龍王は空中から此の有樣を見て、忙しく八戒、沙僧を呼んだので、兩個は驚いて澗の緣へ降りて、行者を岸へ抱き上げて見ると、渾身が氷のやうになつて、四肢が蜷蝸んで居る。沙僧はもう死んだものと思ひ込んで、聲を放つて慟哭むのを、八戒は傍から制して、

『兄弟、まあ哭くのは後廻しにして、お前は脚を折つて坐らせて呉れ。俺が一つ按

摩をして見るから。』といふ。

沙僧が脚を曳伸ばして、盤坐をかゝせると、八戒は兩手をかけて全身を揉み和げて行くうちに、行者は忽ち聲を出して、『師父！』と呼んだので、沙僧は喜んで、

『哥々、確かりして下さい。』といふ。『我們がついて居るから。』

行者は眼を睜いて兩個を見たが、

『兄弟、龍王は何うした？』と尋ねる。

三龍王は此の聲を聞いて空中から答へると、行者は龍王の勞を謝して立回らせました。

行者は八戒、沙僧に扶けられて松林に入り、少時休息するうちに元氣も次第に恢復して來たので、兩個に向つて言ふには、

『此の妖精は神通廣大で、容易に手を下す譯には行かない。今は南海の觀音菩薩を迎へて來る外はないが、殘念なことに渾身が痛んで觔斗雲を起すことが出來ない。如何したらよからう？』八戒は之を聞いて、

『それでは老猪がお迎へに行つて來よう。』と言棄てゝ、雲に駕つて南の方へ飛んで

行きました。

妖精は行者を走らして一旦洞裡へ回つたが、ひとり心の中で「孫行者は三昧火に逢つて退いたが、あのまゝでは濟まさないだらう。何處か別な所へ行つて加勢を頼んで來るに相違ない。」と思ひながら密かに雲へ駕つて洞を跳出し、空中に立つて看下して居ると、霎時して八戒が南を指して出掛けて行きました。「南へ行くからには、必定觀音菩薩を迎ひに行くのだらう」と妖精は心に思つて、急に雲を下り、小妖を呼んで、

『今八戒を賺して連れて來るから、皮袋を出して待つて居ろ！』

と命けて置いて、再び雲へ駕ると、近路を通つて、八戒よりも先へ廻り、觀音の姿に化けて待つて居ました。八戒は夢にも知らず、雲を飛ばして急いで來ると、忽ち眼の前に觀音菩薩の姿が見えたので、雲を停めて菩薩を拜し、此回の一伍一什を述べて、救ひを求めると、假觀音は八戒に向つて、

『火雲洞の洞主は決して人を殺すやうな者ではないから、屹度何かの行違ひに相違ない。』と言つた。『兎に角洞へ行つて、唐僧を釋すやうに說諭してやるから、後へ跟いて來るがよい。』

二人はやがて火雲洞の上へ來て雲から下り、洞の口へかゝると、不意に澤山の小妖が現れて前後左右から八戒を引包み、見る間に捉倒して、袋の內へ裝入れ、ぎり〳〵と口を綑げて、梁の上へ弔して置きました。

(二) 三昧火

行者は沙僧と共に松林の下に坐つて八戒の回りを待つて居たが、忽ち一陣の風が頭上を掠めて洞の方へ吹いて行つたと思ふと、行者は大きな嚏を一つして、『や、これはいかん！』と言つた。『此の風は魔風だ。殊によると八戒が妖精に出

會したかも知れない。一寸行つて見て來るから、爰に待つて居なさい。』

言棄てゝ、行者は澗を越えて洞の前まで行くと、小妖們が目早く見つけて、魔王に報告する樣子でしたが、やがて多勢の小妖們が、喊の聲を擧げて、行者に逼つて來た。行者はまだ身が疲れて居て、働く氣力がないので、急に逃げ出しながら、一個の包袱になつて、路傍に轉がつて居ると、小妖們は行者の姿を見失つて、慌てながら、包袱を拾つて魔王の前へ回り、

『孫行者は慌てゝこんな包袱を置いて逃げて行きました。』と報告する。

魔王は小妖們の報告を聞くと、笑つて、

『然うだらう、彼奴は三昧火に燒かれて動ける筈はない。』と言つたが、『そんな包袱は其邊へ抛つて置け！』

小妖們が包袱を抛つて行つた後で、行者は一根の毛を拔いて包袱に變じ、自分は蒼蠅になつて洞内へ飛んで行くと、忽ち梁に弔られた皮袋の中で、八戒の呟く聲が聞えたので、行者は愈々八戒が妖精に捉へられたことを確め、直に洞門を出て、元の松林へ回つて來ました。

沙和尚はひとり松林の中で行者の歸るのを待ち詫びて居たので、行者を見ると忙しく樣子を尋ねます。行者は八戒が妖精の捕虜になつて、皮袋へ裝られて居た次第を話し、此の上は自分が行つて觀音菩薩を迎へて來るより外はないと言つて、觔斗雲に駕つて一飛に南海に到り、菩薩を拜して、紅孩兒の事を訴へると、菩薩は行者を見て、

『彼れの三昧火は尋常一樣の猛火ではない。よし魔を降して遣はさう。』

と言ふかと思ふと、忽ち手に持つた淨瓶を海の中へ投げ入れました。行者は何故といふことを知らず、呆氣に取られて見て居ると、海中の波が俄に湧き上つて、浪の裡から一個の烏龜が、背に淨瓶を載せて浮み出し、菩薩の前へ爬ひ上つて來ました。菩薩は行者に向つて、

『あの瓶を持つて來い』と命じる。

行者は近寄つて瓶を抱き上げようとしたが、分毫も動かないので、菩薩の前へ回つて、

『弟子には到底動きません』と答へる。

菩薩は笑つて、

『此の瓶は常時は空瓶であるが、今海に抛下して、一海の水を盛り入れた。汝はまだ海をあげる力量がないので、動かないのだ。』

と言ひつゝ、下りて行つて右の手で輕々と瓶を提げて、左の掌へ載せると、龜は幾度か頭をさげて、また波の底へ沈んで行つた。

『此の瓶の中の甘露水は、龍王の雨なぞとは異つて、よく三昧火をも消す力がある。』

と菩薩は語を續けた。「實は汝に持たせてやらうと思つたのだが、汝には動かないといふから、一緒に行つて汝の師父を救つて遣はさう。』

菩薩は又惠岸を天上界へ遣つて、托塔天

王の三十六把の天罡刀を借りて來させ、呪語を唱へて千葉の蓮臺に化し、其の上に身を托せ、祥雲を起して、普陀落山を離れ、惠岸と行者を隨へて號山へ着きました。

菩薩は火雲洞の上空へ來て、淨瓶を傾けると、まるで雷鳴のやうな音がして、瓶中の水が流れ落ちる。其の時菩薩は行者を呼んで　左の手を出させ、楊柳の枝を甘露水に蘸して　行者の手心へ一個の「迷」の字を書き、此字を手の裡に握つて、妖精と戰ひ、故意と敗けて、逃げながら、折々手心を開いて敵に見せながら、此處まで引出して來るやうにと命じました。行者は直に洞口へ來て棒を揮つて洞門を打破ると、妖王は

怒つて洞外に跳出で、長鎗を扱いて突きかけて來るので、行者は棒を擧げて應待ひながら、じり〳〵と退き、折々左の手心を見せて誘ふと、妖怪は夢中になつて赶つて來る。とう〳〵菩薩の面前まで引寄せて、行者は忽ち身を菩薩の後光の影へ隱すと、妖王は菩薩の前へ進んで、目を怒らし、

『汝は孫行者に賴まれて助太刀に來たのか？』

と言つたが、菩薩が一言の答もなく、蓮臺の上に端座するのを見て、妖怪はいきなり鎗を上げて菩薩の胸を目がけて突きかける。

菩薩は忽ち金光と化して空へ上り、行者、惠岸と共に雲の上から眺めて居ると、妖怪は笑つて、

『猴め、俺を錯認つて、幾番戰つても敵はないので、又あんな膿包菩薩を賴んで來ても、俺の一突で影も形もなく消え失せたではないか。』と言つたが、菩薩の遺した蓮臺を見て、『慌てゝこんな物を置いて行つた、よし〳〵俺れが其の上へ坐つてやる。』と言ひながら菩薩の眞似をして、手足を盤めて、蓮臺の中央へ坐る。菩薩は此の樣を見て、楊柳の枝を地へ向けながら一聲『退け！』といふと、かの蓮臺の花彩も祥光も

忽ち消えて、三十六把の天罡刀となり、妖怪の兩脚を貫ぬくので、妖怪は兩脚から血を流しながら、牙を咬んで疼みを忍へ、刀を抓んで拔き捨てようとする。菩薩は又呪語を念じると、刀は忽ち釣針のやうに曲つて、妖怪の腿へ食ひ入り、拔かうとしても拔けないので、妖怪は悲鳴を擧げて訴へて言ふには、

『菩薩、弟子は眼はあつても、珠がなくて、あなたの廣大な法力を見ることが出來ませんでした。萬望慈悲を垂れて、私の生命を饒して下さい。今日限り惡事をやめて、徒弟になり、佛の道を守ります。』

菩薩は之を聞くと、金光と共に空を下つて、

『汝は戒行を受けて、如來の徒弟になるか、どうぢや？』と尋ねる。

『生命さへ饒して下されば、喜んで戒行を受けます。』と妖怪は涙を流して答へる。

『それならば汝に摩頂受戒を授けやう。』と言ひながら、菩薩は袖の中から剃刀を取出し、進み寄つて妖怪の髮を左右へ剃り落し、頂へ三個の旋毛を殘して、三個の角髮を立てゝ、『斯うして戒を授けた上は、汝はもう我の徒弟だ。これからは善財童子と名乘るがよい。』

妖怪は點頭いて菩薩の戒を受けたので、菩薩は手で指して、一聲『退け！』といふと、天罡刀は殘らず拔け落ちて、童子の身には毫しも傷がついて居ません。菩薩は惠岸を呼んで、天罡刀を天上へ還させる。此の時童子は性根がまだ据らないで、腿の疼みが去り、臀の傷が癒つたのを見ると、急に高慢な心が起つて、「今のは一つの妖術だ、あの菩薩に何の法力があらうや」と思ふや否や、鎗を執つて、菩薩を目がけて突きかゝる。行者は驚いて棒を上げて打たうとすると、菩薩は急に行者を制して、袖中から一個の金輪を出し、一振り振つて『變れ！』といふと忽ち五個の輪になつた。菩薩は童子を目がけて五個の輪を拋りながら『着け！』といふと、一個の輪は童子の頸に套り、他の四個は四肢に套りました。菩薩は訣を結んで、口の中に呪文を唱へると、童子は忽ち身を悶き、地に伏し轉んで苦むのを見て、菩薩は行者に向ひ、

『此の寶貝は曩に如來から授かつた金、緊、禁の三個の箍兒の中の一個だ。緊箍兒は汝に授け、禁箍兒は守山大神に授けたが、此の金箍兒はまだ其のまゝに殘して置いたのを、今此の童子に授けたのだ。』と說明する。

やがて菩薩が訣を解き、呪文をやめると、童子は忽ち疼痛を忘れて爬ひ上つたが、

頸にも手足にも悉く金箍が嵌まつて居るのを見て、慌てゝ取外さうとしたが、まるで肉の中へ食ひ込んだやうになつて、引いても、突いても動かない。行者は笑つて、

『菩薩は汝が育たないでは困ると思召して其の頸圈をはめて下すつたのだ』といふ。童子は之を聞くと大に怒つて、急に鎗を取つて行者に突きかけるのを、行者は身を躱して菩薩の後面へ隱れて、『呪文を、呪文を！』といふ。菩薩は楊柳の枝を甘露に蘸して、振掛けながら、一聲『合へ！』といふと、童子は忽ち鎗を落し、双手を胸へ當てゝ合掌したが、其のまゝ手を開くことが出來なくなりました。童子は爰に至つて始めて菩薩の法力の廣大なことを覺ると共に、自然に頭が下がつて菩薩の前に跪拜しました。

此時菩薩は口に動眞言を念じて、淨瓶を傾け、一海の水を一滴殘さず元へ戻すと、行者に向つて、

『疾く洞へ入つて汝の師父を救へ！』

と分付け、童子を伴れて南海へ回つて行きました。

行者は觀音菩薩に別れ、直に雲を下つて松林へ回ると、沙和尚は行者の歸りを待ち詫びて、行李を馬に駄はして、搜しに出ようとするところだつたので、行者の話を聞くと大に喜んで、兩個一緒に松林を出て、澗を跳越えて、洞裡へ進み、小妖們を殘らず打殺して、三藏と八戒を救ひ出しました。三藏は行者から觀音菩薩が魔王を連れて行つた一伍一什を聞き、涙を流して喜び、南方を望んで禮拜して恩を謝しました。其の間に沙僧は洞内で齋飯を調へたので、一同は充分に吃つて火雲洞を出掛けました。

(三) 黑水河

一

藏師弟は火雲洞を出て、西に行くこと數十日で、一つの大河の邊へ出ました。水の色は藍を溶いたやうに黑く、河幅十里に亙つて、滔々として天をも浸す勢がある。師弟は岸に立つて眺めて居ると、忽ち上流から一艘の小舟を棹して來る者があるので、三藏は喜んで沙僧に命じて、呼ばせると、船夫は聞きつけて舟を岸邊へ漕ぎ寄せたが、其の舟を見ると、一段の木頭を刻つて、中間に一個の倉口を

造へただけのもので、二人がやつと坐れる場席しかない。師弟は二度に渡ることに相談を定め、先づ八戒に三藏を扶けて舟へ乘らせましたが、やがて河の中央へ行つたと思ふ時分に、忽ち一陣の風が吹起つて、波を捲き飜へすと見る間もなく、船は三人を乘せたまゝ波の底へ捲き込まれて、影も形も見えなくなつてしまひました。

行者は此時始めて氣がついて、

『今思へばあの船夫にはちと不審な點があつた。彼奴が風を起して師父を攫つて行つたに相違ない。』と言つて悔しがる。

『哥々、私が行つて樣子を見て來ますから、茲で行李を守つて居て下さい。』と言ふが早く、沙僧は衣服を脱いで水の底へ下つて行く。

沙僧は水を分けて行くと、忽ち一の宮殿の前へ出た。門の上に「衡陽峪黑水河神府」といふ八個の大字を鐫付けてある。裡面から話聲が聞えるので、耳を傾けると、

『氷いこと待つた甲斐があつて、今日やつとあの和尚が手に入つた。あれは十世修行の善人で、一塊の肉を吃へば、不老長生の効があるといふから、鼻を招いで共々に命を延べようと思ふが、誰を使にやつたものであらう?』と話して居る。

沙僧は之を聞いて陸へ回り、行者に此の話をして居ると、忽ち水中から一個の老人が走り出して、行者の前へ來て、叩頭をして、涙を流しながら言ふには――

『私は此の河の神ですが、昨年の五月、一個の妖怪が、西洋海から大潮に乘つて此處へ參り、老年の私を攻めて、黑水神府を奪つて、己れの住所にしました。私は餘儀なく龍宮へ參つて訴へましたが、彼れは西海龍王の妹の子に當りますので、私の申條が立ちません。大聖、私に力を借して下すつて、何卒、此の怨みを晴らしていたゞきたい。』

行者は之を聞いて

『よし、それならば先づ龍王を引連れて來て、此の怪物を擒へさせよう。』

と、沙僧と河神を殘して、行李を守らせて置いて、雲を飛ばして西洋海へ行きました。行者はやがて雲を下り、避水の訣を結んで、波を開いて行くと、忽ち一個の黑魚の精が、文匣を持つて行くのに出逢つたので、「此奴黑河から來た使に相違ない」と思つて、いきなり棒をあげて打殺し、文匣を開けて見ると、果してかの妖怪が舅の龍王を招待する書簡でした。行者はにつこりと笑つて、『これはいい證據が手に入

つた』と呟きながら、龍王に會つて直に此の書簡を渡すと、龍王は披いて見て大に驚き、慌てゝ行者の前へ手を突いて、幾重にも謝りながら、

『此奴は妹の九人目の兒で、前年雨を錯へた罪で、魏徵に斬られた者の遺兒ですが、修行のために黑水河へ遣はして置きましたのに、飛んだことを仕出來しました。直樣搦め捕つて差出しますから、何卒、御勘辨を願ひます。』

と言つて、太子摩昂に五百の兵を附けて、行者と共に黑水河へ遣はしました。

行者は摩昂と黑水河の邊まで同伴つて來て、一足先に沙僧の居る處へ回つ

て待つて居ると、少時して摩昂は妖怪を縛つて行者の前へ連れて來ました。行者は妖怪に向つて其の罪を責め、沙僧と河神をやつて、三藏と八戒を救ひ出させた後、妖怪は摩昂に與へて西洋海へ連れ回らせました。此の時河神は行者の前に跪いて、水府を回復して貰つた恩を謝し、此の恩返しには、路を開けて、一同を無事に彼岸へ渡さうと言つて、阻水の法術を使つて、上流を堰き止めましたので、忽ち目の前に一條の大路が開け、三藏師弟は樂々と黑水河を渡ることが出來ました。

(四) 車遲國

一

藏師弟は黑水河を過ぎて進むうちに、冬も過ぎて春の初めとなりました。一行は四方の景色を眺めながら、緩々と行くと、忽ち前方に幾千人の吶喊の聲が聞えるので、行者は直に空へ上つて見下すと、眼の下に一座の都城があつて、城外の沙灘に澤山の和尚が集まつて、車を曳きながら、一齊に掛聲をして、急な阪を曳上げて居るのです。行者は忽ち雲を下り、雲水の姿に身を變じて、僧の側へ進んで理由を尋ねると、衆僧は一齊に跪いて、恂々しながら話し出しました。

『老爺は外國からおいでになつて、此の國の事情を御承知ないでせうが、此の國は車遲國と申し、國王が道士を信仰して、私共を此の通り虐待するのです。其の所以を申しますと、丁度今から二十年前に此の國に大旱がありまして、國王は我們に雨を祈れといふ仰せでありましたが、我們がいくら經を念じても、一向に雨が降りません。其の時虎力大仙、鹿力大仙、羊力大仙といふ三個の仙人が現はれて、法術を以て雨を降らしましたので、國王は俄に三人の大仙を國師と敬ひ、國中の寺を毀ち、寺領を奪つて悉く大仙に與へました。それ以來大仙は我們を奴隷のやうに使役ひ、斯うして毎日住房の工事に使ふ磚瓦などを運ばせるのです。ですから、初めのうちは二千人餘りもありましたのが、苦楚に堪へかねて六七百人は病死し、七八百人は自殺しまして、今では我們五百人だけが死にも得せず、毎日一度宛湯のやうな粥を啜り、夜は沙灘へ臥て、纔に命を維いで居るのです。』

『そんな苦楚をする位なら何故此處を逃げないのか？』と行者が尋ねると、衆僧は涙を流して訴へます。

『それが逃げられないといふのは、その大仙が國王の准を得て、我們の畫像を四方へ貼り出し、一個の和尚を捉へる時は、官職のある者には、官三級を陞し、官職の無い者には、銀五十兩を賞與に賜はるといふ布令が出て居りますので、一歩でも此の國を出る譯に行かないのです。それともう一つには、夢の中に太白星君のお告があつて、「東土から西天へ經を取りに行く羅漢の徒弟に齊天大聖といふ人があつて、人間の難儀を救ふのを勤めとして居るが、遠からず此の國へも來て、道士を滅ぼし、禪敎を再び國中に弘めるやうになるから、且く苦楚を忍んで、待つて居よ」といふことでありましたから、我們は死ぬにも勝つた苦惱を堪へて、只々其の齊天大聖のおいでになるのを待つて居るのでございます。』

『併し其の齊天大聖が此處へ來たにしても、お前達はまだ會つたこともない人を、どうして見分けることが出來るか？』

『否、それは分ります。太白星君からよく伺つて居りますから。』

『太白金星は何と言つた？』

『石の額、金の睛、圓い頭、毛臉で、まるで雷公のやうな貌をして、手には金箍棒を持つて居ると申されました。』

行者は之を聞くと呵々と笑つて

『それなら眞實の姿を見せてやらう。』

と言ひつゝ、身を動かして忽ち本相を現はしたので、衆僧は一同地へ平伏て行者を拜し、

『大聖、何卒、我們の恨を雪ぎ、此の災難を救つて下さい。』といふ。

行者は一把の毛を拔いて、三百人の僧に一本宛分けてやり、

『さア、これを無名指の爪で握つて、且く何處かへ行つて隱れて居なさい。若し誰か捉へようとしたら、手を開いて、一聲『齊天大聖！』と呼びさへすれば、乃公が行つて護つてやる。用が濟んだらまた手を握ればそれでよい。だが、あまり遠くへ行つてはいけない。乃公が城へ入つて、道士を退治すれば、直に榜を出すから、それを見たらみんな回つて來て、乃公の毫毛を返すがよい。』と言つて放してやりました。

此の時三藏は行者の歸りの遲いのを心配して、八戒、沙僧を連れて、此處へ來ましたので、行者は右の始終を話して居ると、散り殘つた十餘人の和尚が三藏の前に頭を下げて、

『我們は城内の勅建智淵寺の僧ですが、此の國の太祖の勅願の寺といふので、我們の寺だけはまだ毀たれずに居りますから、今宵は城内へ入つて我們の寺でお泊り下さい。明朝は孫大聖がよいやうに計らつて下さるでせう。』

と言つて、三藏師弟を案内して城内へ入りました。

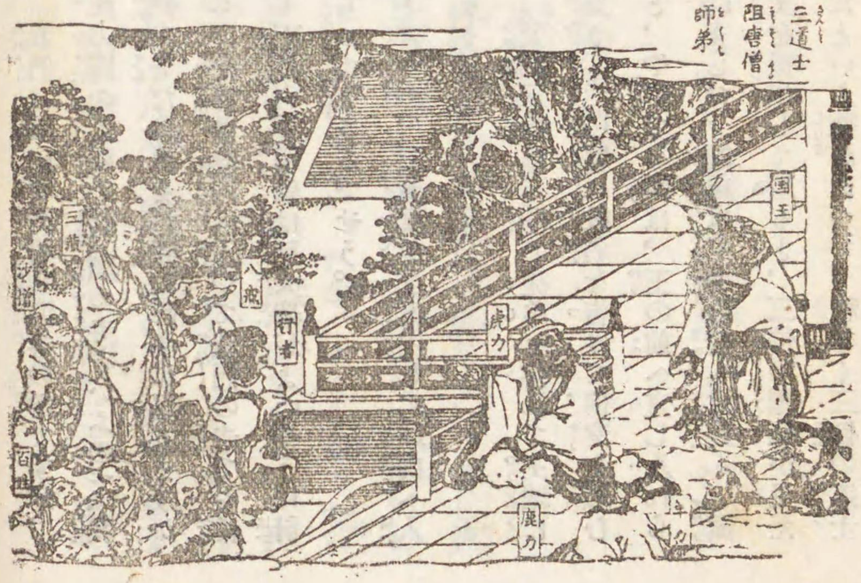
翌朝三藏は三個の徒弟を伴れて王城に赴き、黄門官に姓名を告げて傳奏を賴むと、やがて一同は、王の前へ宣し入れられました。師弟は玉堦の前へ立並んで關文を提出して居ると、三位の國師が見えたといふ報があつて、程なく三個の道士

が入つて來るのを見て、國王は玉座を下りて、上座に迎へます。道士らは國王に禮もせず、上座に着いて、三藏師弟を横目に睨みながら、王に向つて、

『あの堦前に列んだ四個の和尚は、何處から參つた者ですか？』と尋ねる。

『あれは東土大唐から王命を奉じて西天へ經を取りに行く僧で、關文を換へるために爰へ參つて居る者です。』と王が答へる。

道士らは之を聞くと、王に向つて、昨日是等の和尚が城外で五百人の僧を放したことを告げたので、王は驚いて、急に左右に命じて、四人を捕へさせようとすると、行者は王に向つて、『陛下、まア暫くお心を鎮



めて、貧僧の啓奏げることをお聞き下さい。』といふ。『我們は昨日東土から參つたばかりで、まだ街道も存じない者が、五百人の僧を逃がすなどと、そのやうな事を致す筈がないではありませんか？陛下、願はくば此の點をお察し下さい。』

國王は行者の辯解を聞いて有理と思ひ、決斷を下し兼ねて居ると、黄門官が來て、『只今門外へ數多の百姓が參つて春から雨がなくて困つて居りますから、國師に願つて雨を祈つて戴き度いと申出でました。』といふ。

國王は之を聞いて三藏師弟に向ひ、

『朕が道士を敬ひ、僧を滅する所以は、以前旱魃の折、僧に命じて雨を祈らせたが、更に其の效が顯はれなかつた、その時天幸に國師を降して民の困難を拯つて下すつた、之に因つて僧の無用を覺つたためである。』と國師を敬ふ理由を話し、『汝們は今遠方から來て、國師の尊嚴を冒す上は、當然罪に行ふべきであるが、且く罪を恕して、國師と法力を比べさせ、若し汝們の行力で雨を祈り得たらば、罪を饒し、關文を換へて、西天に行かせよう。又若し雨が降らなかつたら、汝們を罪に行ふことにしよう。』

雨乞ひ

行者は國王の前に進んで謹んでお請をしたので、國王は命じて祭壇を掃除させ、五鳳樓に上つて上覽になる。

其の時虎力大仙が先づ壇に上り、符を燒き、呪文を唱へて、風の婆、雲の童子、雷公、電母、四海の龍王を呼ぶのを見て、行者は一根の毛を拔いて假身とし、急に空へ上つて神々を制して置いて、三藏が壇に上つて經を讀む間に、合圖をすると、是々の神々はそれ〴〵に風を吹かせ、雲を起し、雷鳴電火を投げ、大雨を降らしたので、國王は大に感じて、宮廷に回ると、直に關文を換へて、唐僧を通さうとしました。

此の時三個の國師は、國王を止めて、更に法術を闘はして、此の耻辱を雪ぎたいと願ふので、行者も進んで之に應じ、樣々の法術を闘はして、三個を破り、殺して見ると何れも獸の精で、虎力は虎、鹿力は鹿、羊力は羊の姿を現しましたので、國王は驚き且つ喜び、唐僧師弟を智淵寺に案内して、樣々に欵待し、翌日は諸方へ榜を出して、僧を召還し、又宮中に大饗宴を設けて、師弟を招き、饗宴が濟むと、關文を換へて、文武百官と共に三藏師弟を城外まで見送りました。此の時五百人の僧は

榜を見て、四方から集まつて來たが、師弟の姿を見ると、一同地に跪いて禮拜し、行者の前へ出ては、口々に助命の恩を謝して、毫毛を返しましたので、行者は一々に受納め、一同に別れて路を急ぎました。

(五) 通天河

師弟は車遲國を離れて西に進むこと數月、折しも秋の初でしたが、一日行き暮れて、月の光をたよりに人家を尋ねて進んで行くと、忽ちどぶん〳〵と岸を打つ浪の響が聞えて來ました。月光にすかして眺めると、一條の大河が前面に横たはつて、河幅は殆ど見通しのつかない程の廣さがあります。水邊へ出ると一面の石碑があつて、上には「通天河」といふ三大字を顯はし、其の下に「徑過八百里、亙古少人行」と二行の小文字が鐫つてある。三藏は之を見ると早くも眼に涙を浮めて、又新しい難に遭つたと思ひ煩つて居ると、幽かに皷鈸の音が聞えて來ました。八戒は眞先に聞きつけて、

『師父、あの音をお聞きなさい、何處ぞで佛事を營む家があるものと思はれます。

さあ、彼處まで行つて、宿を借り、齋を化ひ、此の河の渡口を問いて、明日船を搜して渡ることにしませう』といふ。三藏も有理と聞いて、徒弟と共に皷鈸の音をたよりに沙灘を歩いて行くと、果して一簇の人家が見えて來ました。三藏は馬を下りて村へ入つて行くと、路頭に門外へ一張の幢幡を竪てた家があつて、裡には燈火の光煌々と輝き、香の烟が馥郁と流れ出して來る。三藏は片時門外に佇んで居ると、裡面から一個の老人が門を閉めに來たので、合掌して老人に向ひ、『老施主、ちと物がお尋ねしたい』といふ。

老人は慌忙しく禮を還して、『師父は何處から來られた？』と尋ねる。『貧僧は東土大唐王の命を受けて、西天へ經を取りに參る者ですが、當處へ來て日が晩れましたので、一夜の宿を願ひたいと思つて上りました。』『東土と言へば此里からは五萬四千里の路程があると承はる。其の遠方を單身で來られる筈がない。』と老人は疑ひ深い眼を向けて言つた。『否、單身ではありません。三個の徒弟があつて、貧僧を保護して、やう〳〵此處まで參つたのです。』と答へて、三藏は徒弟を呼んで老人に紹介はせる。

老人は三個の姿を見ると吃驚して、門の内へ逃込まうとするのを、三藏は引止めて、『徒弟們は此の通り醜い貌はして居りますが、決して怪しい者ではありません。何れも龍虎を伏し、妖怪を捉へる力を有つて居るのです』といふ。

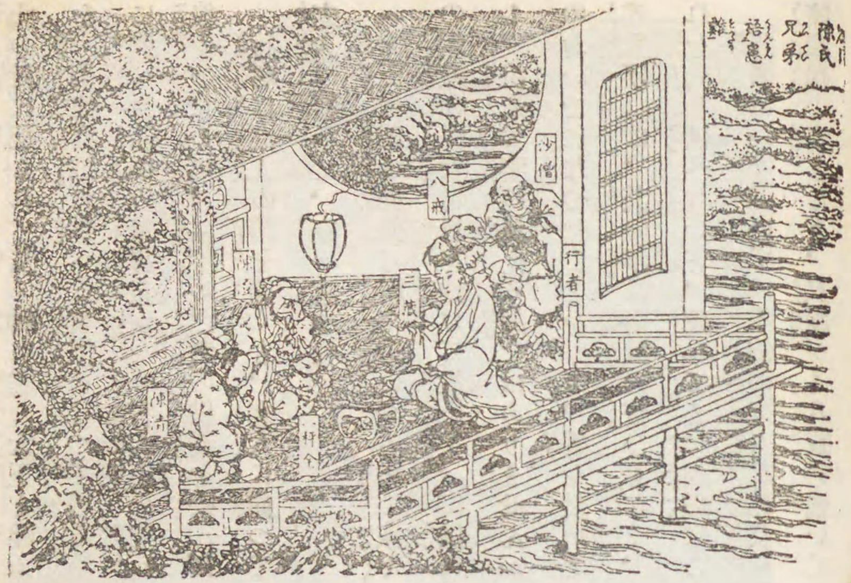
老人はまだ半信半疑の樣子でしたが、兎も角もと師弟を案内して、裡内へ入れました。

廳へ通ると、此の時數人の僧が經を讀んで居たが、三人の姿を見るや否や、『妖怪が來た！』とばかりに、燈火を踏倒して奥へ跑込んで行つた。三人は覺えずぷつと失笑して、腹を抱へて笑ふのを、三藏が叱りつけると、三人は一言も回さずに靜まつたのを見て、老人は急に三藏に向つて、

『然う徒弟をお叱りにならないで下さい。丁度佛事も濟んだ所ですから宜敷いのです。』

と言つて僕を呼んで燈火を點けさせた所へ、又一個の老人が出て來て、師弟に禮をして座に着き、童們に命じて茶を獻じ、齋を運ばせて、三藏師弟を欵待しました。

齋が濟むと、三藏は兩個の老人に向つて、



『今日は、何の御法事をなされたのですか？』と尋ねる。

『これは前以て亡者の法事を致しましたのです』と老人が答へる。

『前以て亡者の法事をするとは、何ういふ譯です？』と三藏は解し兼ねて問ふと、兩個の老人は一齊に涙を流して、

『長老、まあお聞き下さい。』と言つて次の話を語り出しました。

此の老人は兄弟で、兄を陳澄、弟を陳清と言ひ、兄は六十三歳、弟は五十八歳になるが、陳澄には一秤金と呼ぶ今年八歳の女があり、陳清には陳關保といふ今年七歳の男がある。所が

えにけい

此の村に祀られて居る神に靈感大王と呼ぶ荒神があつて、毎年の祭に必ず童男童女を一個宛犧牲に供へる習慣になつて居るが、今年は丁度此の家の輪番になつて、上に述べた兩個の童男童女を今宵大王の廟へ牲に供へねばならないので、孩兒らの後生のために、預め亡者の供養を營んだのでした。

行者は老人の話を聞くと、老人に向つて、先づ其の靈感大王の樣子を尋ねるので、老人は答へて、斯う語つた。

『大王は威靈顯然な神で、いつも村の家々へ通つて來て、家内の人々を見知り、其の秘藏な兒女に目を注けて置いて、御供に當てるのです。大王が來ると申しまして も、決して姿の見える譯ではありませんが、たゞ一陣の風が吹いて來るので、大王のおいでになつたことを知り、香を焚いて拜むのです。それで御意に叶つた犧牲を差上げれば、其の年は雨風の狂ひもなく、百姓の助けとなつて下さるのですが、それを若し供へないと、荒れて〳〵大變なことになるのです。』

行者は一々聞いて、兩個の老人に兒女を連れて來させ、一搖り身を搖すつて忽ち陳關保の姿となり、又厭がる八戒を强いて一秤金の姿に變らせ、替身となつて、靈

感大王の廟へ運ばれて行きました。

さて行者と八戒は、童男童女の姿に變じて、紅漆の盤に乘り、二張の卓に載せられて、犧牲の豚や羊と共に村人に擡出され、鑼、太鼓の音に送られて、靈感大王の廟へ來ると、人々は兩人の乘つた卓を中央へ据ゑ、樣々の牲醴を列べて、一齊に頭を地につけながら、

『大王爺々、今年の祭主陳澄等、毎年の例に遵ひ、童男一名陳關保、童女一名一秤金、猪、羊の牲醴數の如く奉ります。大王願はくば享けて、風を調へ、雨を順へ、五穀の豐登を護りたまへ。』

と祈つて回つて行きました。

行者は顏を上げて見ると、正面には『靈感大王之神』と金字で書いた牌が掛つて居る。八戒は人々の散つたのを見ると、急に薄氣味が惡くなつて來て、何かと卑怯な事をいふのを、行者は叱りつけて居ると、少時して、腥い風が颯と廟の中へ吹込んで來るので、八戒は身を竦めて、

『一件が來たんだ！』と小聲で言ふ。